第十一則　黃檗噇酒糟漢

垂示云、佛祖大機全歸掌握、人天命脈悉受指呼。等閑一句一言驚群動衆。一機一境打鎖敲枷。接向上機提向上事。且道什麼人曾恁麼來。還有知落處麼。試擧看。

「垂示に云く、佛祖の大機、全く掌握に歸し、人天の命脈、悉く指呼に受く。」是れは黃檗の大機大用を稱揚したもので、三世諸佛歷代祖師か衆生濟度の爲にする善巧方便を一切手中に收めて與奪自在な機用を現するのみか、人間界天上界に凡そ在りと在らゆる者の命根血脈を左右して、活かさうと殺さうと胸三寸に在ると謂ふのだから、黃檗も大方恐縮するだらう程の思ひ切つた托上振りである。「等閑の一句一言、群を驚かし衆を動かす。」此度は黃檗の大慈悲門で、ホンの苟且の一言半句か群衆を驚かしたり動かしたりする。「一機一境、鎖を打ち枷を敲く。」一機一境とは前きの第三則にも在つたが、心の働きを主觀的に身體の上に示すのが一機で、客觀物の上に心の働きを現はすのが一境で、文字言句の葛藤に絡らまれて轉身の自在を失つて居る禪學者でも、佛病祖病に罹つて自から知らず心地の開明を礙げられて居る辨道の士でも、黃檗は其の一機一境の活作略を用ひて之を接化する。「向上の機を接し、向上の事を提く。」若し夫れ上々根機の者を接得するには、また之に相應すへき絶對向上の手段に依る。「且らく道へ、什麼人か曾て恁麼にし來る、還つて落處を知る有り麼。試に擧す看よ。」そこで座下の衆に向つて道ふのは、上來謂ふたやうな大機用底の人物か

一體昔から世に在つたのかな。殊に今ま衲か示衆して居る所の趣旨眼目かハツキリ攫めて居るのか何うかと、斯くして本則に結歸せしめた。

擧。黄檗示衆云、汝等諸人盡是噇酒糟漢。恁麼行脚何處有今日。還知大唐國裏無禪師麼。時有僧出云、只如諸方匡徒領衆又作麼生。檗云、不道無禪、只是無師。

黄檗禪師に關しては、評唱の中に詳曲を極めて居るから、就て見らるゝが良いが、其の冒頭に「黄檗身長七尺、額に圓珠有り、天性禪を會す」とあるやうに、堂々たる異相を具へた上に、天性禪を會すで、沒量大の機格を有して生れながら悟つて居つたと云ふから、實に大したものだ。

潙山禪師か曾て高弟の仰山に向つて、「馬大祖の會下八十四人の中に、眞に馬祖の大機大用を得て居る者は誰か」と問ふた。すると仰山か應へて、「百丈禪師か馬祖の大機を得、黄檗和尚か馬祖の大用を得て居る、餘は唱導の師のみ」と云ふて居る。我が道元禪師は「黄檗は百丈の法子として百丈よりもすぐれ、馬祖の法孫として馬祖よりもすぐれたり。祖宗三四世の間、黄檗に齊肩するなし」と絶讃して居らるゝ所より察するに、餘程黄檗に就て見らるゝ所が有るのであらう。黄檗は名を希運と云ふて、法を百丈に嗣き、其の門からは臨濟如き龍象が出て居る。

本則は黄檗の噇酒糟漢の一則であるが、古來云ふてあるやうに、巖頭末後の句の根基は尚ほ可いか、最も苦しいのは黄檗の「禪無師」の一著ぢやとあり、白隱禪師も「黄檗、恁麼の告報、鳩鳥水に落つ、飲む者皆死す。謂つ可し、作家の宗匠、人を殺すに眼を

貶せずと。山僧二十年錯つて會す。汝等容易の看を爲す勿れ。須らく知るへし、大唐國裏但だ一箇の大善知識なきことを。前後際斷して宇宙に獨歩す。見得分明なれば、汝に饒す惺々の漢」と謂はれてある。古來向上の祕曲として取扱はれた一則である。

「擧す。黄檗衆に示して云く、汝等諸人盡く是れ噇酒糟の漢。」身の長七尺も有らうと云ふ大入道か、大音揚げて、お主達はどれもこれも酒糟ばかり喰らつて居る奴共ばかりぢや。灘生一本の味は迚も知るまいがと怒鳴つた。これは所謂古人の糟粕を嘗めるといふに當るもので、殊に文字や言句に捉らはれたり、古則公案などに欽まり込んで眞理を解し得ないやうな擔板漢を罵倒するに應はしい言葉である。

「恁麼に行脚せば、何の處にか今日有らん。」お主達のやうに、あの寺に百日、この寺に五十日と、行脚修行して歩き回り、ヤレ五位の四料簡の、話看の默照の、此の經文の意はどうの、彼の語錄の句はどうのと、そんな枝葉末節に拘泥して居るやうなことでは、設使百足の草鞋を踏み破らうとも、終に今日はと思ふ時は恐らく有り得まい。「何處有今日」とは、黄檗自況の語で、此の拙僧の境涯はそんなことでどうして得られるものかと謂ふたのだと說くも有るが、頌にある如く凛々たる孤風自ら誇らぬ黄檗が、强いてそんな自負の語を弄するとは取られない。「今日」とは一大事を明らるむことで、所謂大事畢了の日といふことである。卽ち己事を究盡して大休歇の日に到らうと云ふには、徒に雲水乞食のやうなことばかりやつて居るのじや駄目だ。何を愚圖々々して居るのだと叱り付けたのである。圜悟は「今日を用ひて什麼か作さん」と著語して、黄檗は今日と云ふにひどく力瘤を入れて居るが、悟に今日の明日のと云ふことかあるものか。斯身本來成佛て、既に空劫

以前に悟り拔いて居るぞ」といふ鹽梅だ。

「還つて大唐國裏禪師無きことを知る麼。」全體お主等は支那四百餘州をウロツキ廻つて、いくら草鞋錢を遣かつたからとて、禪の師匠など云ふ者が天下に一人も在るものか。それがお主等に分らぬのか、白痴めといふ威勢だ。加藤咄堂氏は玆に至つて、夫の戴益か悟道の際に盡日尋春春未到、芒鞋踏遍隴頭雲、歸來又過梅花下、春在枝頭已十分と詠んだ詩の意を玩味したいと云ふて居らるゝが、實にそうだと思ふ。春が春がと終日野山を躋陟して春を尋ねて見たが、到る處一向に春らしい感を爲さずに、已む無く薄暮歸へり來つて己が家の墻角に立てば、梅花既に幾枝かを横たへ、一種の暗香風を待たずして馥郁として居るといふので、一體佛の禪のと四百餘州を行脚して師を求めて遍歴しても、黄檗の云ふ通り實に無駄なことだ。自己心性のことは他人に教へて貰ふものじ

やない。既に父母未生以前から己れに在つて昭々靈々として不昧なるものだ。

「時に僧有り出て云く、只諸方徒を匡し衆を領する如きんば、又た作麼生。」時に衆中一僧在つて、老大師の一言聞き捨てに成らぬとでも思つたものか、今ま老師は大唐國裏に禪師無しと言はれるけれども、それでも現に諸方に大衆を集めて宗乘を擧揚して居らるる宗師は隨分澤山御座つて、坐禪觀法もし、提唱作務等もやり、盛に竪說横說もして居らるゝが、あれは一體何としたもので御座るかと、一本突込んで來た。這僧こそ則ち憧酒糟漢中の第一人者でがなあらう。所謂竿頭の徑線を知らぬ徒輩である。

「檗云く、禪無しとは道はず、只た是れ師無し。」這の一句實に公案の眼目で、禪が無いなどとは言はぬぞ、禪には師匠が無いと謂ふ。

這の黄檗無師の語に對して、ヤレ此れは奪命の神符だとか、ヤレ此の公案は佛邊法邊の糟を喰はぬ向上の拈提であるとか、前きにも云ふた通り最も苦しい一著じやとか、如何にも仔細有り氣な評を下たすものか多いけれども、惟ふに黄檗にして見れば、會下參禪辨道の誰彼にも容易に首肯され得へき佛法の眞理を、極めて裸々灑々と道ふたまでのことで、天地一法の人に與ふへきものは無いと、直下に自家穩密の田地を知らしめんとする婆心一片に外ならぬ。黄檗は晩年有名な裴休の知遇を受け、裴休から黄檗山の一禪刹を創建して貰つた間柄であるが、或る時裴休が彼に向て、「山中四五百人、幾人か和尚の法を得たる」と問へるに對して、彼が「得る者其の數を測る莫し」と答へ、裴休が更に「何故」と問ふたのに、「道は心悟に在り、豈に言說に在らんや。言說祇た是れ童蒙を化するのみ」と應へて居る所を見るも、亦以て彼が「無師」

の底裡を窺ふに足るものがある。

第一に黄檗は禪が無いと謂ふては居らぬと特にことわつて居る。單に禪と云へば固より種々の解義が有る譯だが、茲に黄檗が禪と謂ふて居るのは畢竟宇宙唯一實體の大法を指していふもので、夫の古塔主か「空々法界本と自から無爲、隨緣應現、爲さずと云ふ所無し。所以に虛空世界、萬象森羅、四時陰陽皆此れより出づ。放去すれば此の法界より流れずと云ふ所無し。究竟還た此の法界に歸す」と謂ふのも、維摩居士か「或は日月天梵王世界の主と爲る、或る時は地水となり、或る時は火風と作る」と云ふのも、同じく黄檗の所謂禪なるもので、金剛經には之を「一切諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆此の經より出づ」と云ひ、楞嚴には之を「一毫端に於て寶王刹を現し、微塵裡に坐して大法輪を轉す」と說いて居るなど、要するに如是唯一實體の法卽ち黄檗の茲に所謂禪

なるものは、一切の宗教、一切の哲學、一切自然の知識か、之を究むることを以て其の本旨と爲す所のもので、黄檗が禪が無いとは言はぬと特にことわつて居るのは、固より當然至極の次第なのである。

然るに黄檗は「只是無師」と言ふ。是れは現在大唐國裡亦一人の大善知識無しと謂ふのではない。何も禪が無いとは云はんが、只た禪には師匠が無い、悟りには教師が無いと云ふまでだ。禪は教へらるゝものでは無く、悟りは習ひ得るものではない。釋迦以來、歴代の祖師、諸多の賢聖、誰一人禪を教へた、また教へられた、悟りを授けた、また習ひ得たと云ふ者は無い。第一釋尊は何と言はるゝ。一生涯あれほどに堅説横説せられながら、四十九年曾て一字を説かずと謂はれ、其の臨終に際し、文殊が再び法輪を轉せられたいと願ふたに對して、我れ未だ曾て法輪を轉じたこと

は無いではないかと叱して居らるる。玄沙和尚は師の雪峰から、もちつと四方を遍歴して、廣く善知識を叩いて見たらは何うかと勸められたに對して、「達磨不來東土、二祖不往西天」と答へて居る。達磨大師が支那へ參つたことも莫ければ、二祖の慧可大師が印度へ往いたと云ふことも聞かぬと云ふのは、遍參などゝ漫に東西を流浪しても夫れは畢竟無駄事だ。東土西天何處に到るとも、禪に師など云ふものは到底求め得るものでないといふ玄沙の大丈夫な境涯に外ならぬ。また曹山和尚は一僧が「清税孤貧、乞師賑濟」と、愚僧は貧乏で困り居ります、何うか御惠み下されと、法施を請はれたに對して、「青原白家三盞酒、喫了猶道未沾唇」と、何だと、散々青原の酒家で飲んだ揚句に、一向嘗めもせぬなどゝ能くもぬかすなと叱かり付けた。佛法は宇宙人生に充ち滿ちて居る。幾らでも取つて自由に之を我物にするか良い。人から頒けて

貫ふべき性質のものではないと謂ふのである。圜悟禪師に至つてはモツト振つて居る。雲水から「如何なるか是れ佛」と問はれて、「口是禍門」と逃けて居るではないか。全體此處に成ると、第一佛法を會せぬと云ふのが宗師の建前だ、六祖大師の如きは僧から、「五祖大師の御意旨は阿誰か得て居られますか」と問はれたに對して、「夫れは佛法を得て居る人か會得して居る」と應へる。「夫れならば和尚定めて御會得てゐられませう」と云ふと、大師は「衲には會からぬ」と言はるゝ。「何うして御會りには成らぬので御座いますか」。すると大師は「我れ佛法を會せず」と言ふ。石頭大師も道悟禪師から、右と同じやうに「曹溪の意旨何人か得たる」と問はれたに對して、「佛法を會する人得たり」と應へ、「然らば和尚還た得たりや否や」と問はれて、「我れ佛法を會せず」と謂ふ。そこで道悟は更に「如何なるか是れ佛法の大意」と疊みかける、之に對して石頭大師は「得す知らず」と逃けて居る。黃檗が「只是無師」と云ふたは、畢竟箇中の分を明かしたもので、本則の關鍵實に此の一答に在りと謂ふ處だ。

凛凛孤風不自誇。端居寰海定龍蛇。大中天子曾輕觸。三度親遭弄爪牙。

「凛々たる孤風自から誇らず。」「雪竇の此の一頌一に黃檗の眞讃に似たり」と圜悟は評したが、正に其の通りだ。然るに直に續いて「人却つて眞讃の會を作すことを得ざれ、他底の句下便ち出身の處有り」と言ふ。直に黃檗の眞讃を見ては成らぬ、人々如何と看よと注意する。卽ち「情を盡くし、佛法の道理、玄妙奇特を捨却して、一時に放下せば却て些子に較れり。自然に觸處現成せん」と、

眞實契當の處は、元來道理を離れ玄妙奇特を離れたもの、是れ佛ならず、是れ法ならず、是れ道ならざる處に到つて、却つて少分の相應が有り、始て本分が現前すると謂ふて居る。「自不誇」とは或は「無師」に掛けて云ふたものか。元來黃檗の禪的修養は頗る圓熟したもので、裴相國か曾て頌を以て、八千龍象隨高步、萬里香花結勝因、擬欲事師爲弟子、不知持法付何人と、大に稱揚して、弟子入りを希望したけれども、黃檗は一向に喜ぶ氣色も無く、心如大海無邊際、口吐紅蓮養病身、自有一雙無事手、不曾祇揖等閑人などゝ空嘯いて居つたことが有るが、黃檗の大機大用を以てして苟且にも其の大機大用を誇るの風か無く、權門に佞幸しなかつたは偉いと、此の邊のことを指して頌したものか。

「寰海に端居して龍蛇を定む。」是れは固より黃檗の凛々たる孤風を頌したもので、寰宇大海と謂ふから、廣い四百餘州に坐り込んで、龍蛇を定むとあるは、尋常解して居るやうに、單に脚實地を踏んで居る衲子と所謂噇酒糟の緇流とを驗破すると云ふ意味ばかりではなく、其の正眼大機を以て、修行の淺深、證悟の是非を識別し、垂示に謂ふて在るやうに、中根下根の者に對しては一機一境の教化手段に依り、向上の機を接するには向上の事を提くといふので、黃檗の無礙自在なる機用を頌したものである。

「大中天子曾て輕觸す。」これには故事か有る。夫の佛教の外護者として有名な宣宗皇帝か、卽位前大中坊主として鹽官齊安國師の會下で書記をして居つた時に、黃檗は首座をして居つたが、或る日、宣宗は黃檗が佛を禮して居る處に來て、よせば良いのに、「佛に著いて求めず、衆に著いて求めず」と云ふのに、禮拜して何をか求むと問ふた。此の不著佛求云々は「維摩經不思議品」の語であるが、之に對して黃檗は「佛に著いて求めず、

法に著いて求めず、衆に著いて求めず、而も常に禮すること是の如し」と、敢て求めんか爲に禮拜するのでは無い、單に禮拜せんが爲めの禮拜であると答へた。宣宗には黄檗の云ふことか分からないから、重ねて「禮拜して何か爲ん」何等求むる所が無いと云ふのなら、禮拜などしても無意味じやないかと突つ込んだ。そこで

「三度親しく爪牙を弄するに遭ふ」で、黄檗はピシヤリと宣宗の横面をハツた。宣宗は驚いて何を亂暴なと云ふと、黄檗は此の場合亂暴の何のと謂ふて居る段かえと、復たピシヤリとやつた。しかし宣宗は此の二度目のピシヤリに遭ふて多少得る所が有つたと見え、後復たひ還俗して九五の位に就くや、黄檗に號を賜ふて麁行沙門と云ふた。其の麁行が大に有り難かつたと思はるる。則ち雪竇は黄檗格外の玄機を云はん爲、大中天子に於る因緣を擧せられたのである。

第十二則　洞山麻三斤

垂示云、殺人刀活人劍。乃上古之風規、亦今時之樞要。若論殺也、不傷一毫。若論活也、喪身失命。所以道、向上一路、千聖不傳。學者勞形、如猿捉影。且道既是不傳。爲什麼、却有許多葛藤公案。具眼者試說看。

「垂示に云く、殺人刀、活人劍。」毎つも申す通り、殺人刀と謂ふは掃蕩門、活人劍と云へば建立門。しかし禪の上では此の殺人刀と活人劍とは決して銘々獨立の存在ではない。絶後に再び甦るといふて、殺中に活を行するかと見れば、權實不二で、活中に殺を

示す。殺活我に在つて、間に髮を容れざる妙用を、「乃ち上古の風規、亦今時の樞要なり」と道ふのである。則ち釋尊以來西天の四七、東土の二三、皆斯の殺活の機用を盡くして學人に接し、以て一宗の風標規格とせられたが、啻に古に限られたことではなく、現に今時に至りても亦宗師の認めて緊要事と做す所のもので、皆此の關捩子を設けて大衆を攝するのである。「若し活を論せば喪身失命す。」これは常識や論理の上から云ふと、全く正反對のことをいふて居る譯で、禪の禪たる所以のものは畢竟這邊に存するのである。そも〳〵佛法に於ては、常住にして無常、佛にして衆生、煩惱にして菩提などゝ對待せしめては謂はぬ。常住と云ふ時は遍法界盡く常住、無常といふ時は盡大地みな無常、煩惱といふ時は徹底して煩惱、菩提といふ時は菩提一方、佛と云ふ時は衆生は一人も居らぬ、衆生といふ時は佛も衆生の裡に藏くれる、是れが佛

法である。而して此處がそうだ。殺すと云ふ段に成ると、一殺一切殺で、人一人猫一匹も活かしては置かぬ。しかしそれかと謂ふて、之れが爲に天地一毫の傷つくものが有るではなく、箇々其の本位を動かさぬ。是れが即ち死中に活有りといふ消息だ。次に活かすといふ段に成ると、見るもの皆甦がへる。碓嘴花を生じ、髑髏起て舞ふ。而かも了々として見れば、乾坤無一物、佛も無く法も無い。是れ活中に死有りといふ當處だ。「所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳。學者形を勞すること、猿の影を捉ふるか如し」。向上の一路、千聖不傳とは盤山寶積禪師の言葉で、既に前きにも引用されて居るが、殺も一毫を傷らず、活は乃ち身命を喪失するといふやうな向上絶對の境地は、要するに自知自得の外無きもので、之を言句や文字の上に求めても役には立たぬ。結局如何なる學者でも之を模著することの出來ないことは、譬へて云へば猿が水上の月影を捉へんとして能はぬやうなものだ。「且らく道へ、既に是れ不傳、什麼としてか却て許多の葛藤公案有る。具眼の者、試に說く、看よ。」向上の端的は古聖前賢も之を傳授することが出來ず、之を說かんとすれば即ち言を亡すなどいひながらも、何故に古來五千餘卷の經文や七千餘則の公案などいふものが有るのであらうか　幸に是れ此の一則、具眼の者は參詳せよと。

擧。僧問洞山、如何是佛。山云、麻三斤。

「擧す。僧、洞山に問ふ、如何なるか是れ佛。」禪宗史上に於て、洞山と名の付いた有名な禪僧に、洞山良价禪師と洞山守初禪師とがある。而して本則に現はれて居るのは、洞山守初禪師で、即ち雲門の法嗣だ。這の和尙が多分或る時庫裡で胡麻を量つてでも居

つたのであらう。其處へ一人の坊さんが來て、佛とは何かと問ふた。

「山云く、麻三斤。」禪書や祖錄等に於る此種の問答は實に百二十有餘を算へることが出來ると云はれてあるが、其の後學を錯らしむるもの決して少しとしない。これは天地同根、物心一如の義味であるなどと直ぐ片付けてしまふ。そんな理路邊に計較するやうでは、則ち驢年にして而して去らんである。現に圜悟禪師は、此の「麻三斤」に對して、「槐樹を指し柳樹を罵つて秤鎚と爲す」と著語して居るが、即ち洞山の語は麻三斤と謂ふに在るけれども、意は其處に無い、柳樹を罵らんが爲に、故ら槐樹を指して之を詈るやうなもので、本と槐樹に用處は無いと謂ふのである。風外老人は更に此の著語を評して、「江戸の輕口に此の野郎打ち殺して熊の膽を取るぞと云へば、ナニ馬ぢやあるめえしといふやうなことぞ」と謂ふて居らるゝが、佛は麻三斤話上に在ると單純に解してはならぬ、麻三斤に用處は無い。眼東西を看て心南北に在る消息を領略せねばならぬ處である。總評に在るが、五祖演和尚は這の「麻三斤」を頌して、「賤賣擔板漢、貼秤麻三斤、千百年滯貨、無處著渾身」と云ふて居る。眼はしの利かぬ小商人の洞山め、大負けに負けて麻三斤を賣り出したは良いが、千百年店ざらしの古物で一向買手が付かぬ。實にハヤ置き處に困まる。山河大地一杯に塞がつて始末の著けやうがないと云ふので、「麻三斤」の落處を道破して妙と謂はざるを得ぬ。

五祖演和尚は麻三斤を以て、無處著渾身といふ。これは麻三斤が天地一切處に遍滿して摸著することが出來ないと謂ふ義である。宇宙妙明の本體は、名の名づくべき無く、相の取るべき無しと云ふが、然かも偏に一切諸法と爲つて、歷々分明に差別の相を現し

て居る。宋の黄山谷は黄龍禪師に參して禪を學んだが、或る時禪師から、「公の諳んする所の書中に一兩句有り、甚た吾門の事と恰好なり。公之を知るや」と尋ねられたが、山谷は「知らず」と應ふる外は無かつた。時に暑氣漸く退き、秋凉の生ずる頃で、木犀の香が全院に充ちて居つた。禪師は則ち「木犀の香を聞くや」と言ふに、山谷は「聞く」と答ふると、黄龍は「吾無隱乎爾」と、論語述而篇中の語を以て一拶した。山谷は言下に契悟する所が有つたといふことである。諸法實相と謂ふは、この吾れ爾に隱くす所無き遍界不曾藏の、然かも同時に一切の相を離れ名字の相を離れたる眞空寂滅の本體をいふのである。而して古來幾多の諸聖列祖が一機一境の下に、或は揚眉瞬目し、或は拂子を擧起したり、拄杖を拈掇したり、拳頭を竪起したりするのは、爾に隱くす所無き實相無相の眞實法相に向て、箇の入處有らしめんとする接物利

生の手段に外ならぬ。之と同樣な譯で、本則に在る如き、如何なるか是れ佛と問はれて、直下に目前觀照の所を以て應ふることや、如何なるか是れ祖師西來意と問はれて、直に山を指し水を指すなどのことも、亦是れ宗師が同工異曲の作略なのである。

しかしながら錯て會してはならぬ。玆に洞山が麻三斤と云ふ時、佛は早く既に麻三斤の上には無いのである。古人の言葉に明々百草頭、明々祖師意といふがある。しかし一方に於て明々百草頭と謂はん時には、之を離れて祖師の意が別所に存在するのではなく、亦一方に於て明々祖師意と云はん時には、之と同時に百草頭は其の據處を失ふてしまふ。前きに垂示の中に說明した通り、佛法に於ては一法究盡といふ程有つて、有にして無とか、常住にして無常とか、生死にして涅槃とかいふ對待の關係は一切許されぬ。般若心經の色即是空、空即是色にしてもそうだ。これは色空二邊に

渉つて謂ふのては莫くして、色が其のまゝに空、空が其のまゝに色、色と云ふ時は絶對に色の一方一位で、空は全く其の影を收めてしまふ。空と云ふ時は徹底して空の一時一法で、色は全然面出しをせぬ。馬祖は大梅から「如何なるか是れ佛」と尋ねられて、「即心即佛」と答へたが、後に又た一僧の同じ問に對して、此度は「非心非佛」と應へて居る。趙州も「狗子還有佛性也無」の問に對へて、或は「有」といひ或は「無」と云ふ。馬祖の答處は佛や心や、即非等の理邊に在るのではなく、趙州の答處亦狗子佛性や、有無の語脉に繫かるのでは莫くして、馬祖や趙州が即佛や有と道ふ時は、萬法只だ即佛、有の一法究盡、また非佛や無と謂ふ時は、法界只だ非佛、無の脱體現成で、俱に宗旨の分を明かにしたものである。

されば靈山會上の事にしてもが、釋尊が金波羅華といふ花を拈して衆に示さると、大迦葉一人が之を視て微笑した。すると釋尊は正法眼藏、涅槃妙心を大迦葉に付囑すと言はるる。これは大衆中獨り大迦葉のみ、世尊拈華の玄旨を見破し得たことに相違無いが、直に之を以て、釋尊が一輪の金波羅華を拈して天地至道の玄微を象徴せられたのを、迦葉一人が斯の如く之を會得したのだなどと早合點せば則ち正鵠を失する。趙州が如何是祖師西來意に對して、庭前柏樹子と答へたは、固より祖意を指して直に柏樹なりと爲した意趣ではない。如何是佛と云ふに對して、雲門は無雜作に乾屎橛などと答へた。我が明惠上人は「佛を乾屎橛などと勿體も無いこと」と歎ぜられたと云ふが、是れなども直接佛を指して乾屎橛なりと云ふ意味合ひのものでは莫く、以上は總て第一機上より言ふ所のもので、敢て謂はゞ即ち無差別平等の理體に向て、當機覿面に自家獨特の見處を著する次第のものである。「如何なる

か是れ佛」に對して、洞山守初禪師は「麻三斤」と答へた。若し其の時守初禪師が秋香全院に滿つる山寺の方丈になり居つたとしたら、木犀の香を聞くやとでもやつたであらうし、別に覿面觀照のものが無かつたならば、或は夾山和尚のやうに、口は禍の門とでも拶著し去つたことであらう。會ま庫裡に胡麻を量つて居つた因緣で、麻三斤と應へたまでだ。洞山の意は固より佛の上に在るで無く、更に進んで云はゞ、また必ずしも麻三斤其の物の上にも無い。圜悟が「只管に句中に去つて求めば、什麼の巴鼻か有らん」と評したのは、洞山の意を句中に覓めても不可得で、無益の業だと戒むるのである。

金烏急、玉兎速。善應何曾有輕觸。展事投機見洞山、
跛鱉盲龜入空谷。花簇簇錦簇簇。南地竹兮北地木。

因思長慶陸大夫。解道合笑不合哭。咦。

「金烏急に、玉兎速なり。」金烏といふは日、玉兎といふは月、日飛び月走るとの謂である。此れは「如何なるか是れ佛」曰く、「麻三斤」と、洞山の答處、電光石火間髪を容れざるの妙を稱へたものだと道ひ、或は日月の一切處を照らして、然かも無心なるが如くに、洞山の心が麻三斤の上にも在らず、佛の上にも在らぬ端的を頌したのだなど、人々に依て各々其の解釋を殊にして居るやうであるが、實は此の句即ち是れ麻三斤の當意で、寧ろ「如何なるか是れ佛」に對する好箇の答辭として。「金烏急、玉兎速」を見るべしと思ふ位のことである。

晩間日は西に落つるかと看れば早くも月は東より出づる。蕪村の句に「菜の花や、月は東に日は西に」といふがある。西には殘

陽がまだ菜の花の野末に茜さしてゐるに、月は早くも既に東の山の端に昇る。實にそれをそれ、これをこれと、其の間に安排計較を著するスキが無い。洞山の答處に就て、佛が麻三斤か、麻三斤が佛かなど擬議する暇が無い。靈雲禪師に向て、長慶が或る時、「如何なるか是れ佛法の大意」と問ふと、靈雲は「驢事未去、馬事到來」と答へた。佛法の大意を以て驢事と爲さんか、馬事と爲さんか、驢かと見れば馬、馬かと見れば驢、實にそれをそれ、これをこれと見辨する隙が與へられない。眞に是れ本分眞了的の消息である。洞山の答處に向て、佛を棄てゝ麻三斤に著し得ず、麻三斤を棄てて佛に著し得ず、實に金烏急に、玉兎速なりだ。

「善應何そ曾て輕觸有らん。」善應とは能く對者の機根に應ずることで、洞山が佛を問はれて直下に麻三斤と答ふ。思惟分別に渉らぬからと云ふて、それで決して輕忽に遇らつた譯では無く、正に

本分契當の處を道ふて居るのである。「有靜而善應」と題した雪竇禪師の一頌で、「祖英集」に斯ういふ文字が有る。曰く、覿面相呈、不在多端、龍蛇易辨、衲子難瞞、金鎚影動、寶劍光寒、直下來也、急著眼看、と。即ち寂靜無心にして而かも能く來機に應ずといふ題意である。師家と學人、面々相對し靈犀相通ず、一挨一拶、之乎者也は無い、作爲は要らぬ。這裡に龍蛇利鈍を辨別することは難しとしないが、具眼の禪流は常靜にして起處が無いから、一機一境を以て容易に之を瞞著することは許されない。實に作家同志の立合に成ると、一言隻句金鎚影動き、賓主兩々相對して寶劍光寒し。蓋し這の二句は寂然として心靜に、能く一切に應じて餘す所無き底を謂ふたものである。此の金鎚影動く處、寶劍光寒きの邊、其の間實に一毛を容るゝスキも無い。遲疑せば看失ふぞと氣を付けられた。要するに前句金烏急、玉兎速の底意を一層明かに

せんが爲、圜悟の特に引用したものである。

「事を展へ機に投して洞山に見えは、跛鼈盲龜空谷に入る。」這の句の義を知らんが爲には、後句の「花簇々錦簇々、南地竹兮北地木」と、之れが前後を顚倒して講説することが順序を得て居るやに思はる。「花簇々、錦簇々」とは、古歌にある「見渡せは柳櫻をこきませて、都そ春の錦なりける」、是れだと釋宗演老師は云はれて居るが、都は春の銀世界、これぞ眞に諸佛の國土、麻三斤の明々覿露だ。評中に出て居るが、或る僧が「洞山麻三斤の意旨如何」と智門和尙に問ふた。すると、智門は「花簇々錦簇々、會す麼と」反問した。僧が「不會」と應へると、智門は「南地竹兮北地木」と云ふ。洞山麻三斤の意旨は、花爛漫の諸佛國土、毘盧遮那法界ぞと云ふに、これが凡僧には分からぬ。是に於て重ねて言ふ、諸佛國土、毘盧遮那法界といふは、南地竹と北地木のことだと。則

ち山は突兀、海は渺茫、盧山は煙雨浙江は潮、法界有り姿のまゝが、其の儘に麻三斤の佛國土だと、是に於て智門和尙實に老婆心切を窮めたものだ。

然るに右の「花簇々、錦簇々」は智門の語に非ずして、これは開福の德賢和尙が、「如何なるか是れ古佛の心」と云ふに對して答へた一句であると、大智禪師は考證して御座る。何れにしても結構な答意で、其の間二致は無い。所が彼の僧依然として智門の答意が會得出來ないので、到頭本家の洞山守初禪師に來つて請益した。すると洞山は、お主一人に聞かす譯にはいかぬと、遂に上堂して曰く、「言は事を展ふること無く、語は機に投せず、言を承くる者は喪し、句に滯る者は迷ふ」と、即ち雪竇の所謂「事を展へ機に投して洞山に見えば」は、全然洞山の右の語に由來して居るので、人々分上の事は言說を以て展ぶべからず、言語を以てして

は眞機に投契せんこと難い、是を以て言說を以て眞實を示さうとすれば却て眞實を失ふし、言語を認めて眞實のものと爲す者は必ず歸趣に迷ふと洞山は云ふ。佛を指して麻三斤と謂ふのか、麻三斤を以て則ち眞實不妄の佛性と做すのかなどゝ、そんなことで洞山の落處を尋ね廻りでもすれば、それこそチンバの鼈やメクラの龜が空谷に入つて惑ふて居るやうなもので、埒は明かぬ。

「因て思ふ長慶、陸大夫。道ふことを解す、笑ふへし、哭すへからす」と。陸大夫とは陸亘大夫といふて、當時宣州の觀察使であつたが、南泉禪師に參して頗る禪に造詣が有つた。然るに師南泉の示寂に際し、寺へ行いて追弔の供養をするかと思ひきや、イキナリ靈前に於て呵々大笑したとある。そこで院主の和尙之を咎めて、「師匠の遷化に當て哭するこそすれ、笑ふとは底事ぞ」といふと、大夫は「先つ貴僧の見處を言ふて見よ。それに相應の分有らは哭しても見やう」と云ふ。然るに院主無語だ。すると陸亘は反對に「悲しや哀しや、和尙さまは亡くなられてしまつた」と大聲揚げて慟哭したと云ふ。この事を後に長慶が聞いて、「大夫笑ふが本當だ。哭しては成らぬ」と評したとある。そも〳〵雪竇が右の故事を引いて之を「麻三斤」に對する頌と爲したに就ては、果して如何なる意趣に出でたのかと問ふに、之に適切なりと思はるゝ解答を古今の書中に求めて幾んど得べからず、多くは解釋を避けて故ら等閑に付してしまふて居る。蓋し陸亘大夫が師僧の奠祭に逢ふて靈前に大笑したと謂ふは、世禮世諦の上から云ふて實に風狂に近い所爲たるは勿論で、それは「如何なるか是れ佛」に對して「麻三斤」と答へた洞山の當處が、論理常識の上から謂ふて大に突飛に聞かるゝと同然、若し前きの院主のやうな者が居たらは、必ずや洞山に向て、「和尙何と勿體無い、佛樣を胡麻三斤とは底事そ」

と咎め立てをするに相違無い。そこで若し洞山が改めて「佛とは如來の智惠德相を具へたものだ」と言ふたなら、此度は長慶如き作家から、必ずやまた「洞山、麻三斤と答ふるか本當た、麻三斤で可し。決して如來云々と云ふては成らぬ」と抗議が起るに相違無い。「如何なるか是れ佛。」曰く「麻三斤」。雪竇は長慶と共に是々と首肯して居るのである。

「咦。」咦と雪竇は最後に今一度注意を加へた。這の一字闢、當下に虛空を消殞し、普徧を失せしめて十方廓然だ。

第十三則　巴陵銀碗裏

垂示云、雲凝大野徧界不藏。雪覆蘆花難分朕迹。冷處冷如氷雪、細處細如米末。深深處佛眼難窺。密密處魔外莫測。擧一明三即且止。坐斷天下人舌頭、作麼生道。且道是什麼人分上事。試擧看。

「垂示に云く、雲、大野に凝つて、徧界藏さず、雪、蘆花を覆ふて、朕迹を分ち難し。」此の二句は一切處に彌綸して正徧互融、平等即差別、差別即平等なる獨露底道體を詩的に表現したもので、雲は大野に凝つてと云ふから、大地黑漫々即ち平等一色の體、然かしそれがそのまゝ徧界藏せずと云ふから、高きものは高く低き

ものは低く、全體分明、法々覆藏せず、即ち差別自然の相である。雪が蘆花を覆ふといふから乾坤白一色、何れが雪、何れが蘆花とも見分け難いが、それでも雪は雪、蘆花は蘆花たる迹は分明にして分明で、朕迹を分ち難い一色邊に、物々各々其の家風を呈して居ることを云ふのである。以上は巴陵の答處を指して謂ふ。「冷處は氷雪よりも冷かに、細處は米末よりも細かなり。」前きの二句は相に就て敍し、此の二句は性に就て示すのである。則ち一口に云へば、此の二句は、宇宙無上の大道は廣狹大小の量をも超越し、冷暖高低等の對待をも絶する不可思議解脱法門なることを謂ふので、其の「深々たる處、佛眼も窺ひ難く」、其の「密々たる處魔外も測ること莫し」と、則ち這の不可思議解脱法門の深々たる處に至つては、三世洞觀の明眼を具へて居るといふ佛と雖、之を窺ひ得ず、其の密々たる處に至つては、五通を有すと云はるゝ天魔外

道も亦之を測ることが出來ない。「擧一明三も即ち且らく止く。」假令一隅を擧げて他の三隅を知るといふ怜悧の漢も、佛眼も及ばず、魔外も測ることの出來ぬ解脱の法門に至りては、智惠才覺を以ては奈何ともすべからず、則ち且らく問題とせずして置くが、「天下の人の舌頭を坐斷して作麼生か道はん。」サテ然らば文殊も言ふ能はず、維摩も默し得ざる端的の處に向て、何とか道ふて見なければならないが、「且らく道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ。試に擧す、看よ。」サテ此處で一言なりとも云ひ得る者が若し有りとせば、そは果して何人でがなあらう。巴陵其の人にして始めて言ひ得べし。茲に巴陵銀碗裏の一則がある。此の話頭に參して看よと。

擧。僧問巴陵、如何是提婆宗。巴陵云、銀碗裏盛雪。

茲にいふ提婆は、迦那提婆と稱し、夫の有名なる龍樹菩薩が月輪相の說法中に、朗々と讃嘆の聲を揚げたことから、更めて禮を具へて、龍樹の所を尋ね、閑坐法談に及んだ。其の時、評中にもあるやうに、大士は豫じめ侍者に命じて鐵鉢にナミ〳〵と淸水を盛り、之を前に端坐して提婆の到るを待つて居ると、提婆來つて之を見るや、靜に懷中から一本の針を取り出して、之を鉢中に投じた。是れが始まりで、龍樹は深く提婆を器とし、遂に佛心宗を傳へて法嗣と爲すに至つた。當時印度に於る大乘佛敎といへば、此の龍樹提婆一門を中心とせる所謂三論の空宗で、殊に提婆は天性才辯が有つて、當時の小乘や外道の徒を片つぱしから破邪顯正して、盛に宗風を鼓吹したものだ。

夫の圓月相の示衆といふは、禪門に於ても極めて名高いものに成つて居るが、或る時、龍樹菩薩が座下に向つて、「汝等諸人、佛性は我見有る者には見えぬ。佛性を見んと欲せば、先づ汝の我慢心を去れ」と言ふと、群衆の中から質問が發せられた。「佛性は大なるか、小なるか」と。「佛性は大に非ず、小に非ず、廣にあらず、狹にあらず、福も無く、報も無く、生せず亦死せず」と、龍樹がかう答へたかと思ふと、高座に在つて大自在身を現じ、只一輪の滿月を見る如くにして、龍樹の肉身は見えぬ。衆中に迦那提婆有り、讃歎の聲を放つて云ふ、「あゝ、尊者自身、佛性の體相を現して吾等に示す。是れぞ無相三昧、形滿月の如くにして、佛性の義廓然虛明」と。此の聲の終ると共に、滿月の相滅して、龍樹は次の偈を唱へた。身現圓月相、以表諸佛體、說法無其形、用辨非聲色。道元禪師は、「正法眼藏」「佛性」の卷に於て、此の圓月相を解釋され、これは決して龍樹尊者が何か變幻じみたことを爲した譯のものでは莫く、また尊者が諸佛體を化現して見せたといふ次第

でも無い。高座した尊者それが諸佛體の示現だ。吾等も坐禪すれば、それが直に身現圓月相だ。人々のこの身か、これ無缺無餘の圓月相であると示さるゝ。

「擧す。僧、巴陵に問ふ、如何なるか是れ提婆宗。」實に龍樹菩薩は釋迦の再來と讃へられ、八宗の祖と仰がれた程有つて、思想幽遠、學識博洽、其の後世に貽されたる「大智度論」の如き、「中觀論」の如き、今に到つてなほ大乘佛教の骨髓であり、明鑑とする所である。蓋し龍樹や提婆一家の思想の中核を爲すものは、諸法皆空と云ふことで、「大智度論」中にも、「此の空は是れ十方諸佛深奥の義」と謂ひ、則ち「大品般若」の所謂「一切の法を空にして、此の空も亦空なり」と一般、此の空智に達する時は、實に一切の何物をも空すべきもの無く、有らゆる盡くが其のままながらの一大眞理で、皆本性自爾の德有りといふのである。寔に夫の四句百非と謂ふものは、特に龍樹系統の大乘佛教に於て、此の眞空無相不可得の理に入らしむる形式と爲す所のもので、四句とは、龍樹の「中論」に於て之を「諸法不自生、亦不從他生、不共不無因、是故知無生」と說明し、即ち諸法は自ら生ずるにあらず、他より生ぜしものにあらず、自他和合して生ずるにあらず、去りとて無因より生ずるにあらずといふ。百非とは、是れ亦諸法の無生不可得なることを說明する形式で、有無一異生滅去來等の上に、非を如何程累ぬるとも、究竟諸法の當相を說明し得べからずと謂ふのである。

「巴陵云く、銀碗裏に雪を盛る。」達磨に依て傳へられた禪の一宗は不立文字、教外別傳を以て宗義と爲し、釋尊一代時教の文句に依らぬことを建前として居るに反して、提婆宗は主として佛語や文に據る眞理の研究を主眼とする所から、一方を經師論師とか

教意とか云ふと、一方を禪家とか祖意とか謂ふて、幾んど氷炭相容れぬ間柄のやうに考へ、諸方の叢林で頻に之れが問題とされてゐて、本則の問答も亦達磨正傳の禪旨と、教經論部を中心とする提婆宗の教義とが、果して共存し得るものか然らざるかに、這僧が疑を挾んだ所に、其の端を發して居るのである。

總評に在るやうに、馬祖は「凡そ言句有るは是れ提婆宗」と謂ふて居るが、しかし禪宗に於ては、必ずしも言句を邪魔にはせぬ、トント語話を以て礙と爲さぬのみならず、道元禪師の如きは「言語道斷は一切の言語是れなり、心行所滅は一切の心行是れなり」とさへ言はれてある。東語西話是れ無舌の語、不說の說なりといふものである。されば巴陵和尙は、岳州の新開院に住院の後、或る僧が「祖意と教意と是れ同か是れ別か」と問へるに應へて、「鷄は寒うして樹に上り、鴨は寒うして水に下る」と、教家は經論を講じ、禪者は教外に別傳する、等しく大法を傳へん爲めだ。別に仔細は無いといつた鹽梅。また或る教家の講學僧から「佛一代所說の一切教意は疑はぬ。只だ禪宗の本旨とする所如何」と問はれて、「白浪を貪り觀て手撓を失却す」と答へて居る。教意の祖意の と、兩般が有るものか。天上の月を貪り觀て、掌中の珠を失はぬやうにせよと警めて居る。此處には「如何なるか是れ提婆宗」に對して、直に「寶鏡三昧」中の「銀盌盛雪、明月藏鷺」から引いて、「銀碗裡に雪を盛る」を以て應じた。禪宗は禪宗よ、提婆宗は提婆宗よ。教意は教意、祖意は祖意よ。しかしながら禪宗本と祖意無く、提婆宗本と教意無し。南山に鼓を打てば、北山に舞を作し、三門頭に喚呼すれば、兩廊下に點頭す。張公酒を喫して、李公醉ふ。以上の三話頭皆一模脫出といふべきだ。

從容錄第六則に、馬祖が「四句を離れ百非を絕し、請ふ師、某

甲に西來意を直指せよ」と云はれて、「我れ今日勞倦す、汝が爲に說くこと能はず、智藏に問取し去れ」と應へて居る。龍樹佛教の根本形式たる四句百非を離れて、達磨正傳の的意を直指せよとは矢張祖意教意の間に迷へる所から生ずる要求だ。すると馬祖は衲は今日大分に勞れて居るで、貴僧の爲に說明してやる譯に行かぬから智藏の處へ行いて尋ねて貰ひたいといふ。そこで僧は智藏に行くと、俺は今日頭痛がするから、話は御免だ、百丈に問へといふ。然るに百丈は俺はそこの處は一向不案內だとシラを切る。實は四句を離れ百非を絕した當處が即ち西來意で、問處即ち答處であるから、彼れの此れのと分說すべき餘地は無いのである。要するに馬祖も智藏も百丈も僧に向て無舌の語、不說の說を聞かして居るので、這の言中の響を聞き取ることが出來たなら、答話を謝すで濟むことである。但だ巴陵は、這の彼れの此れのと分說すべき餘地の無い處に向て、銀碗裏盛雪と答へたまでである。

巴陵は後ち出世して雲門に嗣承したのであるが、更に法嗣の書を作らず、只だ三轉語を將つて雲門に上つたと云ふ。其の三轉語と云ふは「如何なるか是れ道。明眼の人、井に落つ。」「如何なるか是れ吹毛劍。珊瑚枝頭月を撐著す。」「如何なるか是れ提婆宗。銀碗裏に雪を盛る」即ち是れである。然るに右の第三句は「祖意教意と是同歟、是別歟。鷄寒上樹、鴨寒下水」と爲つて居るとの一說がある。而して湛堂は之に一頌を附して、鷄寒上樹、鴨寒下水、時節不相饒、古今自然理、寒松十里吼淸風、流水一溪聲未已と曰ふ。言ふことを休めよ、祖意と教意と。本と是れ古今自然の理。松韻溪聲妙言詮とでも註する處だ。雲門大師は右の三轉語に對して非常な滿足で、「他日老僧が忌辰に當ては。只だ此の三轉語を擧せば、恩を報ずること足りなん」と云ふたとある。

老新開。端的別。解道銀碗裏盛雪。九十六箇應自知。
不知却問天邊月。提婆宗提婆宗。赤旛之下起清風。

「老新開。」巴陵新開院顥鑒禪師と尊敬して頌した。

「端的別なり、道ふことを解す、銀碗裏に雪を盛る。」老新開は流石にちがつたものだ。佛眼も窺ひ難く魔外も測る莫しと云ふ至道の端的を、銀碗裏盛雪を以て道破したのは、また格別の商量だ。圜悟は「鰕跳れとも斗を出てす」と著語した。日月星辰、山河草木、佛祖も魔外も、有りと凡らゆるもの盡く此の銀碗裏から一歩も出づることは出來ないと謂ふ。

「九十六箇應に自知すへし。」釋尊の出世前後に印度に九十六人の外道が居て、迦那提婆尊者も元來外道の哲學者であつたのが、一朝佛教に歸した後は、此等の外道を相手として盛に論戰を交はしたものだ。頌の意味は、九十六種の外道達も、此の銀碗裏盛雪の底裡に至つては、外に向て求めず、應に點頭三下して自知自領すべきだと云ふのである。

「知らずんば却て天邊の月に問へ」。福田行誠上人の般若と題する歌に「何をかは照せるものと冬の夜の嵐のあとの月に問はばや」といふのがあるが、若し巴陵の答話が分からぬのなら、皎々たる大空一輪の月に問へと。月に問ふも月答へず、只だ空蕩々地虚廓々地に於て肯心自から許す底に到つて、始めて得る所のものが有らう。

「提婆宗、提婆宗。」月に問ふも得る所が無くば露柱に問へ、露柱に問ふも得る所が無くば燈籠に問へと推しやつて置いて、雪竇直に全提の所を拈し出だした。是に於て盡大地只だ箇の提婆宗の脱體現成だ。

「赤旛の下清風を起す。」印度では外道と佛弟子とが論議する時に、勝つた方が赤い旗を樹てゝ凱歌を揚げる例になつて居る。則ち提婆宗の徒が、迦那提婆を大將として、赤旗を押立て、外道の敗北組を引率して我が僧堂に凱旋する盛んな樣を、清風を起すと形容したのであつて、雪竇が口を極めて讃嘆隨喜して居る處である。

第十四則　雲門對一說

舉。僧問雲門、如何是一代時教。雲門云、對一說。

此の雲門「對一說」の則は垂示を缺如して、直ちに本則に入る。古來禪門の大家は常に第十四則と第十五則とを、各別に取り上げて講釋をして居らるゝが、蓋し本則は、次ぎの第十五則「雲門倒一說」と同時に行はれた問答商量であつて、隨つて兩則を一串して、箇中の宗旨を究取してこそ、始めて終始を完うし得べきで、之れを別々に取扱ふては、第一本則の底裏にも觸れず、且つ雪竇の頌意をも沒却することになる。

「舉す。僧、雲門に問ふ、如何なるか是れ一代時教。」一代時教と

は、釋尊四十有九年の金口說を謂ふもので、天台宗の智者大師は其の該博なる識見を以て、此の佛一代の說教を五時八教に分類し、所謂教相判釋を立てられたが、今ま大師の五時の判教といふに從へば、第一、華嚴の時、釋尊が大乘無上の法門たる華嚴教を說かれた時。第二、阿含の時。初入の徒を化導する爲、主として鹿野苑に於て、小乘の阿含教を說かれた時。第三、方等の時。小乘より大乘に向はしむる爲、大小乘を併せ說かれた時、即ち維摩經、楞伽經、金光明經等を說かれた時。第四、般若の時。大般若經を說て、諸法皆眞の理を示されたので、權大乘の部に屬する。第五、法華涅槃の時。此は釋尊出世の本願たる、實大乘の妙法蓮華經や大涅槃經を說かれた最後の八年間を云ふ。尙ほ天台宗では釋尊一代の說教を教理上より分類して、藏、通、別、圓の四教、竝に衆生教化の方式上より、頓、漸、秘密、不定等に分類して一代時教を觀察して居る。

雲門の當時に於ても、天台の五時判教又は華嚴の五教等を研究する講學の僧と、禪門者流との間に、宗門上の諍論が盛んであつた爲、禪僧の間にも亦自宗の立場から、佛教の義學的教理に對する禪的批判を求むる者も少からず、此の僧の如きも多分雲門會下の雲水として、右の見地から、教禪の異同に關する師の所見を叩いたものであらう。

「雲門云く、對一說。」評中にも云ふてあるが如く、雲門大師は、尋常簡單なる語句の中にも、必ず三句の宗義を含ましめていふ。其の三句とは、第一句を函蓋乾坤の句といひ、即ち一句に全體を盡すこと。第二句を隨波逐浪の句といひ、即ち相手の機根に應じて當意覿面に對揚すること。第三句を截斷衆流の句といひ、即ち一句の下に對者の無明を截斷すること、即ち是れである。然り而

して本則の「對一說」竝に第十五則の「倒一說」に至つては、實に圜悟の所謂一句中須具三句の典型的一例であつて、之れを函蓋乾坤の句といふべく、隨波逐浪の句といふべく、截斷衆流の句といふべきである。

這の「對一說」に對して、古來種々な拈提が試みられ、中にも「對一說、對一に對二に非ず、機宜に對するにも非ず、對是非迷悟凡聖の對に非ず、一切對待あるの對に非ず、亦絕對の對にも非ず、只何の事も無い一代時教、句々言句只對する一說ぢやとはいふ」などいふ天桂禪師の評釋も有るが、雲門大師は、何も故らにそんな六ケ敷義味の答句を投じたのではないと思ふ。「拈評三百則」中に、指月老人は此の雲門「對一說」に對して「天與白雲曉」と拈評してある通り、對一說とは雲門大師が向下に轉じ去つて、そうとも、そうとも、佛一代の說教は、固より無上正眞の大道を說かれたものながら、所謂應機說法で、華嚴の大乘無上法門から小乘の阿含に至り、方等の時から、更に般若の權大乘より法華涅槃の實大乘に及ぶまで、其外化法の四教、化儀の四教、皆何れも時を異にして、同じく無上佛道を說かれたもので、聖道門といふも、淨土門といふも、如來直說の法門たるに於て二致有ることはない。華嚴にも「現成の家法誰か門庭を立てん」と申されて居るではないかといふのである

しかしながら雲門大師は、決して言句の經をいふのでなく、文字の經をいふのでなく、所謂黃卷赤軸をいふのでなく、他の間文死句を離れ、唯だ爾が本有自性を指した大經卷をいふのである。道元禪師は「知識といふは、全自己の佛祖なり。經卷といふは、全自己の經卷なり、全佛祖の自己、全經卷の自己なるが故にかくの如くなり。」といはれたが、蓋し人々具足箇々圓成底の那一物を

指したもので、這の那一物は、佛に有つても增さず、衆生に於ても減ぜず、昭々靈々、這裏未だ嘗て一點一塵無きものである。卽ち念を離れて佛を見、塵を破つて經を出だすといふことがあるが、古人の桃花を見て悟りたるは、花が卽ち經である。擊竹を聞いて悟りたるは、聲が卽ち經である。金剛經は「是の經典所在の處、則ち佛有りと爲す」と謂ひ、其他如來一代時敎の中に、此の經とあるは、皆箇々本有の佛性を指して云はれたのであつて、而して雲門「對一說」の端的も亦蓋し玆に在りといふべきだ。

曾て六祖大師の會下に、法華僧の法達といふ者が來參した。六祖は法達に示して言はるゝのに、「心迷へば法華に轉ぜられ、心悟れば法華を轉ず。誦すること久しきも、己れを明らめざれば、義の與めに讐家と作る。無念の念は卽ち正、有念の念は邪と成る。有無俱に計せざれば、長く白牛車を御す」と。心迷へば經文に讀まれる、心悟れば經文が讀まれる。如何に久しく經文に親しんでも、己躬の大事を明らめぬことには、依文解義に過ぎぬ。一切の計較ト度を息めて、有念にも墮せず、無念にも涉らぬといふ時、始めて全自己の經卷が現成するといふのである。道元禪師は之に附帶して、「たゞそれ、從劫至劫、手不釋卷、從晝至夜、無不念時なるのみなり。從經至經、無不經なるのみなり」と說かるゝ。晝より夜に至りて念ぜざる時無く、劫より劫に至りて自己と離れざるもの、卽ちそれが經卷だ。孔夫子は「道は人に遠からず、人の道と爲して人に遠きは以て道と爲すべからず」と謂はれたが、手に卷を釋かずといふから、瞬時も經卷と離るゝことは成らぬ。それのみではない、自己が經卷なのだから、經卷より經卷に至つて、全經卷の自己ならざるは莫しといふ程のことである。般若多羅尊者が、國王から、「諸人盡く經を轉ずるのに、唯だ尊者何が故に轉

ぜざる」と問はれて、「貧道、出息衆緣に隨はず、入息蘊界に居らず、常に如是經を轉ずること百千萬億卷」と應へたのも、一切經と一體不二、自己即觀音、觀音即自己の境地をいふたものである

白隱和尚の頌偈に、畢波羅窟裏、未結集此經、童壽釋無語、阿難豈得聽、北風窓紙隙、南雁雪蘆汀、山月苦如瘦、寒雲凍欲零、千佛縱出世、不添減一丁。といふがある。天地の一大經卷は、阿難も聽くことが出來ず、畢波羅窟裏に結集せられたものでもなく羅什玄奘も飜譯するに言葉がない。北風窓隙に入り、窓外の山月凜として細く、一片の凍雲凝つて零ちんとし、忽來南雁雪蘆の汀に下る。此の三冬寒夜の景が、そのまゝ威音那畔の風光で、即ち佛祖直傳の大經卷だ。咄、誰か舒卷せんと喝破する。「如何なるか是れ一代時教」。曰く「對一說」。雲門は即ち此の一大經卷を展舒して見せた。

斯ういふて來ると、必ずや圜悟禪師に、地獄に入ること箭の如しと叱らるゝことであらうが、理は正に然りだ。但だ一番の功夫は寧ろ此の理外に在り。諸君若し蒲團上に親參實究せば、一句了然超百億の奇特有ることを得ん。

對一說。太孤絕。無孔鋌鎚重下楔。閻浮樹下笑呵呵。
昨夜驪龍拗角折。別別。韶陽老人得一橛。

「對一說」と、雲門の答話を再び擧揚した。

「太だ孤絕。」圜悟も「此の語、獨脫孤危、光前絕後」、と評した。此語、禪に非ず敎に非ず、四句を離れ、百非を絕す、太だ孤危峭峻である。

「無孔の鋌鎚重く楔を下す。」無孔鋌鎚とは、孔の無い鋌鎚のこと

を云ひ、宋時代の俗語で、何とも手の附けられぬ代物といふことである。即ち這僧の問頭、實に是れ觜を下し難き所の一問、無孔の鋟鎚に似たり、然るに其の不可説の處に向つて、雲門が之を一句に説了したことを、重く楔を下したといふのである。

「閻浮樹下笑ひ呵呵。」閻浮樹といふのは、印度の神話的地理に於ける須彌山の南に位するところに、閻浮提洲といふがあつて、之れが今我々が住んで居る此の世界だといふので、そこに亭々として天を覆ふ閻浮樹があるといふことになつて居る。其の人間不到の大樹の下で、面白そうに笑ふて居る者がある。何が面白うて笑ふかといへば、面白いことこそあれ、

「昨夜驪龍角を拗折す。」是れが面白うてならぬ。這僧が雲門の爲に「對一説」を以て一拶せられたは、即ち無孔の鋟鎚にくさびを入れられたもので、それが爲に驪龍の這僧が角を拗ぢ折られた。それが面白うてならぬ。圜悟は「止だ驪龍の拗折のみに非ず」と著語して、たゞ這僧の角を拗ぢ折つただけではない、天下の衲僧も自慢の鼻をヘシ折られて、皆氣を呑み聲を飲むと揶揄した。

「別別。」かく頌し來つて、雪竇は更に「別別」と一轉した。雲門は流石に格別の手際だ。容易に折れぬ角を見事に折られたと褒めちぎつて置いて、又茲で宗乘を昂揚して、

「韶陽老人一橛を得たり」と頌した。韶陽とは、雲門禪師は韶州の雲門山に居られたから、之を韶陽老人といふ。雲門龍角を折りは折つたが、僅かに其の一片を折つたに過ぎない。未だ完全を許し難い。もう一本の角はどうなつたか。折れたか折れぬかなどいふ、古來の評釋もあり、それで通ぜぬことはないかも知れないが、此の一橛の橛は、前きの下楔の楔と同樣の義に解すべく、即ち韶陽老人は既に一橛を得たが、更に一隻手を出ださねばなるまいと

の意味に取るべきであらう。

第十五則　雲門倒一說

垂示云、殺人刀活人劍。乃上古風規。是今時樞要。
且道如今那箇是殺人刀活人劍。試擧看。

此の垂示は第十二則麻三斤の垂示と重複して居る。「垂示に云く、殺人刀、活人劍。」毎もいふ通り、殺人刀は、空とも無ともいふ掃蕩門、活人劍は、色とも有ともいふ建立門である。「乃ち上古の風規、是れ今次の樞要なり。」俱に是れ古來の風標規格として、世々の祖師達が之れによつて人を攝したものだ。「且らく道へ、如今那箇か是れ殺人刀、活人劍。試に擧す。看よ。」さて然らば今日殺人刀活人劍と稱し得べきものは、果して如何なるものぞ。それが見

たくば、本則に於ける雲門の活作略を看よと。

舉。僧問雲門、不是目前機、亦非目前事、時如何。門云倒一說。

「舉す。僧、雲門に問ふ。」此の僧は前きに雲門に向つて、「如何なるか是れ一代時教」と問へる其の僧と同一人で、雲門が之れに對して「對一說」と向下に答へた所から、さらば

「是れ目前の機に不らず、亦た目前の事に非らざる時如何。」と、反つて向上より問ひ來つた。目前の機とは、境に對する機、目前の事とは、目前に顯はるゝ境をいふ、卽ち機に非らず境に非らざる處、心外無法、諸法皆空の端的如何と問ふのである。

「門云く、倒一說。」趙州和尙は嚴陽尊者が「一物不將來時如何」

と問ふたに對して、「放下著」。そんなものは打つちやつて了へと云ふ。すると尊者は「一物不將來放下這什麼」。私は一物不將來で、何も打ち捨てるものは御座いませぬ。そこで趙州は「恁麼則擔取去」。欲しければ擔いで行けと一喝して、嚴陽尊者は、豁然として悟つたと云ふ。然るに之に反して雲門は、例の放去收來の言句を以て、問處相應の一答を與へた。是れ答は問處に在りといふもので、大智禪師は、之を好手衆中に好手を呈し、三軍陣上に三軍を奪ふと評して居る。

門云く、倒一說。指月老人は之を拈評して、海和靑嶂昏といふ。卽ち此度は雲門向上に轉じ去つて、其の通り其の通り、機に非ず境に非ざる處、苟も文字章句に涉らば、それは倒一說だと道破した。金剛經に「如來所說皆不可取、不可說、非法非非法」といふ。不可取とは、聽法者に聞無く得無きことを云ひ、不可說とは、說

法者に說無く示無きことをいふもので、非法とは、一切諸法元と名相無きものであるから、之を非法と謂ひ、非非法とは、この名相無き一切諸法の當體が、そのまゝ眞如無我の實相であるから、之を非非法といふのである。されば如來所說の法、皆名相を以て取る可からず、皆言語を以て說く可からず。既に取る可からず、說く可からずとせば、更に法の非法のと言ふ限りのものではないといふのが、金剛經の所說であつて、而して雲門倒一說の落處も亦此處に在りといふべしだ。

藥山が或る時師の南嶽に問ふ。「三乘十二分敎某甲粗知。嘗聞南方、直指人心、見性成佛、實未明了。伏望和尙慈悲指示。」三乘とは、一に聲聞乘、二に緣覺乘、三に菩薩乘のことを謂ひ、十二分敎とは佛陀の所說を十二種に分類したもので、契經、應頌、授記、諷誦、因緣、自說、本事、本生、方廣、未曾有、譬喩、論議等で

ある。卽ち藥山は、三乘十二分敎のことは、聊か心得て居りますが、直指人心、見性成佛の南方禪に至つては、何分未だハツキリ致しませぬ。和尙、何卒御示誨を給はりたいといふたのである。すると南嶽は「恁麼也不得、不恁麼也不得、恁麼不恁麼總不得、汝作麼生」と反問した。直指人心、見性成佛の宗旨を指示してくれと云ふに對して、恁麼不恁麼總不得とは何事ぞ。而かも是れが南嶽得力の處だ。一切諸法は實相といふ可からず、非法といふ可からず、そのものをそれと謂ふとき、恁麼も也た得ず、不恁麼も也た得ず、是といへば觸れる、非といへば背く、何れか一物に涉れば早や既に二見だ。されば什麼物恁麼來に對して、南嶽は說似一物卽不中と答へた。此處でも、禪の奧旨は何かと問はれて、やはり恁麼不恁麼總不得を以て應じたのである。卽ち南嶽に在つては恁麼不恁麼總不得、雲門に在つては倒一說。是同歟、是別歟。

南嶽は、一代時教の恁麼も不可得なれば、機に非ず境に非ざる不恁麼も也た不可得といふ。さればとて、南嶽の恁麼不恁麼總不得にしても、雲門の對一說倒一說にしても、其の落處に於て必ず しも二致が有るのでない。詮する所、則ち法は理趣の間に非ず、道は依文解義に依つて得べからず、須らく先づ自己本分の田地を開拓すべしと示誡せらるゝのである。大原の孚禪師といふは、初め教相家であつた。一日寺內に在つて涅槃經を講じた席上に、會ま一人の客僧が有つて、禪師が涅槃經法身の條を講じ、盛に三因佛性、三德法身の說を說く段に至ると、其の僧思はずも失笑した。講が終つて後、禪師は僧を自分の部屋に引き、茶を進めなどして、さて言ふやう、某甲志狹劣で、徒らに文に依つて義を述ぶるのみ、固より自から及ばざるを知る。何卒御指教を願ふと。すると僧が言ふことには、洵に笑ふては濟まない次第であつたけれども、上

座にはまだ法身のことが本當に分かつておいでゝない。夫れ法身の理は、横に十方に亘り、竪に三世を貫き、八極に充塞すなど說かるゝも、上座はまだ眞實之を會得しておいでにならない。上座の說かるゝ所は、畢竟他人のこと柄を云ふもので、しつかりこれが御自分の物には成つて居らないと。そこで禪師は重ねて謹んで教を請ふといふと、僧は言葉を改め、それでは旬日の間、深く法身三昧に入つて之を得られよと告ぐ。是に於て、禪師は教へらるゝまゝに、法身三昧に入り、端然として靜慮し、法身定に入る。一夜初更より五更に至るまで、深密に法身を究め、全身唯だ是れ法身と成り切つたその時、偶ま胡角の聲を耳にして、忽然として開悟した。その投機の偈に、憶昔當年未悟時、一聲胡角一聲悲、如今枕上無閑夢、大小梅花一任吹と。玆に到つて禪師は最早微動だも無い大丈夫の境界と成つた。法身をしつかと我が物として、

自家屋裏に神通遊戯を爲し得ることに成つたのである。

倒一說。分一節。同死同生爲君訣。八萬四千非鳳毛。
三十三人入虎穴。別別。擾擾忽忽水裏月。

「倒一說。」卽ち雲門の答話を拈起した。

「分一節。」これは問處と答處とピツタリ符節を合するが如き趣を云ふと釋する一說もあるが、蓋し倒一說は對一說と相俟つて、始めて全義を做すもので、隨つて分一節といふは、倒一說を以て對一說の片割れであるとする意である。

「同死同生君が爲に訣す。」評中に云ふてあるが如く、「生に遇ふては爾と與に同生し、死に遇ふては爾と與に同死す」と云ふことにて、「種電鈔」には、「雲門放行の手段自在にして、學人活せば則ち

我亦活し、學人死するときは、則ち我も亦死す。弊垢の衣を着け、同じく糞土を運び、然して後、他の爲に粘を解き、縛を去り、他をして固執を離れしむるを述ぶ。」と解してあるが、殆んど要を悉して居る。卽ち問僧が如何なるか是れ一代時教と訊ぬると、對一說と應へ、是れ目前の機に不らず、亦目前の事に非らざる時如何と問へば、倒一說と拶し、相手の出樣次第で、或は向下に出で、或は向上に轉じ、放去收來、自然奇特の大用を頌したのである。

「八萬四千鳳毛に非ず。」昔日靈山會上八萬四千の聖衆中、世尊拈華瞬目の機を看取した者は、破顏微笑の迦葉一人のみで、大衆は皆惘然として合點が行かなかつた。鳳毛に非ずと云ふは、宋の孝武帝の時、謝超宗といふ人があつて、其の父を謝鳳といひ、謝超は博學にして而かも文才あり、文を以て王府の常侍となり、王の母薨去せるとき、誄詞を作つて奏した所が、武帝その文を見て大

に嘆賞し、超宗殊に鳳毛有りといはれ、之れより父の美を繼ぐ子を鳳毛と云ふやうになつた。即ち釋尊會下八萬四千の大衆といふも、眞に佛心印を傳へ大法を繼ぐに足るべきは迦葉只一人のみで、他は鳳毛といふ譯にはいかぬと云ふ意味である。

「三十三人虎穴に入る。」西天の四七、東土の二三、上は摩訶迦葉より下は六祖大師に至る三十三師は、所謂虎窟に入つて虎子を獲るやうな不惜身命の修行を積み、血滴々の實究を經た方々で、佛法の今日有る畢竟此等祖師方の力に外ならず、而して雲門が己を忘れて人の爲に同死同生する接物利生の手脚も、亦虎穴に入つて虎兒を獲る底のものと謂ふべきだと、倒一説の當處を托上した。

「別別。」雪竇は此處に一段宗乘を高揚して「別別」と向上の一路を指示した。

「擾擾忽忽たり水裏の月。」とは、法に定法の無いことを云ふので、金剛經に「定法の有る無きを阿耨多羅三藐三菩提と名づく」とあり、一定の實法無きものは言語を以て說く可からずといふのである。孫子は「水に定形無し」といふ。水に定形無く、水上の月影亦定形無し。風の因緣に由りて擾擾忽忽たる水裏の月ともなれば、風の因緣息むときは、忽ち潭底を穿つて、水に痕無き一輪の月影と成る。經に、無爲の法を以て、而かも差別有りと云ふは、即ちこの事である。無爲の法とは、寂として水に浮ぶ圓月相のことであり、差別有りとは、水上に碎くる千々の月影をいふ。而かも「通夜からあらしの風にくたかれて、散る玉ことに宿る月影」の古歌にもある通り、千々に碎くる差別の波の上に、團々たる無爲の月影が千々に宿るといふので、而して這の圓明無礙なる無爲の法は差別有るがまゝに、本と名相無く、また語言に涉らずと云ふのである。即ち雪竇は重ねて最後に、擾擾忽忽たり水裏の月と拈頌

して、雲門倒一説の玄旨を高調したことになる。

瑞巖和尚が或る時師の巖頭に問ふ、「如何なるか是れ本常の理」と。本常の理とは、宇宙本然の理とか、天地の常道とか、佛法に所謂清淨本然など云ふべきものである。之に向つて巖頭は「動せり」と答ふ。本常の理といふから、一定不動にして、一方に儼在するものかと思はるゝが、「動せり」、生死去來も有る、六道四生も有る、朝々日は東より出で、夜々月は西に沈む、動いて止まぬといふ。瑞巖は「動する時如何」、それなれば動する時は、本常の理は如何に成りますかと訊ねる。すると巖頭は、「本常の理を見ず」、動する時は、本常の理は沒蹤跡で、見やうにも見られぬといふ。瑞巖、サア分からない、そこで巖頭は「肯へば未だ根塵を脫せず、肯はざれば、永劫生死に沈む」と、二頭に度らず、斷常に墮せざる處に、本常の理を看よと示された。

第十六則　鏡清草裏漢

垂示云、道無横徑、立者孤危。法非見聞、言思迥絶。若能透過荊棘林、解開佛祖縛、得箇穩密田地、諸天捧花無路、外道潛窺無門。終日行而未嘗行。終日說而未嘗說。便可以自由自在展啐啄之機、用殺活之劍。直饒恁麽更須知有建化門中一手擡一手搦猶較些子。若是本分事上且得沒交涉。作麽生是本分事。試擧看。

「垂示に云く、道に横徑無し、立者孤危。」道とは、天地の大道と、或は向上の一路とも云ふ。箇の道は多岐無く、一路長安に通

ずといふ。孔夫子の所謂吾が道一以て之れを貫くと云ふ其の道のことである。而して苟もこの道に立つ者は、獨立獨歩、他人に借らず他人に貸さゞる底のものが無けねばならぬ。「法は見聞に非らず、言思迥絶。」法とは宇宙の大法で、それは能所對待を超へた絶對のものであるから、眼で見たり耳で聞いたりしただけでは、その眞相を窺ひ知ることがならぬ。且つ語言を以て顯示することも出來ねば、思量分別の測り得る所でも無い。「若し能く荆棘林を透過し、佛祖の縛を解開して、箇の穩密の田地を得ば、諸天、花を捧ぐるに路無く、外道潛に窺ふに門無けん。」若し悟道の邪魔になる分別情識を斷ち、更に佛見法見の金鎖をも解き、即ち凡心をも聖解をも盡し了つて、安心立命の處を得たならば、須菩提尊者のやうに天人に窺はるゝこともなく、外道惡魔も近前する隙が無くなる。斯の如き人の平生は無礙自在なもので、心の欲する所に隨ふて矩を踰へぬから、「終日行して未だ嘗て行せず、終日說いて未だ嘗て說かず、便ち以て、自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の劍を用ふ可し」で、朝から晩まで事を行しながら、その行に行相が無いから、之れを無行の行と謂ひ、終日ものを言ひながら、其の言に說相が無いから、之れを無言の言といふ。斯の如くにして言も自由、行も自在、則ち能く啐啄の機を展べるといふのである。啐啄の機とは、鳥の雛が孵化する瞬間、親鳥が卵の外から啄むのと、雛が內から啐ふのとが、間髮を容れず、正に同時であると云ふの義で、即ち師家と學人との機合がピッタリ相合ふて、能く啐啄の機を展べ、更に或は把住或は放行、縱奪自在に對揚する。

「直饒ひ恁麼なるも更に須らく建化門中に、一手は擡げ一手は搦ふること有ることを知つて、猶ほ些子に較るべし。」圜悟は更に言葉を進めて、それはそうであるけれども、衆生濟度の上から謂へ

ば、特に第二義門に下つて化門を開張し、或る時は一手を擡げて人を扶持したり、或る時は一手で搦えて人を折伏したりすることがある。しかしそれとて、未だ聊か道に契つたといふだけのことで、「若し是れ本分の事上ならば、且得沒交渉。作麼生か是れ本分の事。試に擧す、看よ」と。若し夫れ絶對的本分の上から云ふと、そんな一手擡一手搦といふやうな姑息手段は、眞實佛法と相關する所のもので無い。然らば衲僧本分の事とは、果して如何なる事ぞとなれば、本則に就て鏡清和尚の活作略を看よと。

擧。僧問鏡清、學人啐。請師啄。清云、還得活也無。僧云、若不活遭人怪笑。清云、也是草裏漢。

こんな公案になると、看る人の得力如何に依つて看る外は無く、

現に頌の末句に、雪竇が天下の衲僧徒らに名邈すと謂ふてある如く、看る人に依りて如何樣にも品評を下だし得べく、則中鏡清和尚が、也た是れ草裏の漢と抑へつけたのも、亦是れ偏に鏡清の見識に依ることで、固より他の端睨を許さぬものがある。隨つて本則の如きは、あるがまゝに文字を解釋するに止めて、諸君の審究に俟つ外は無い。

圜悟の評唱にもある如く、鏡清は雪峯の法嗣として本仁や玄沙や踈山などと同時代で、家風を張つて後は、常に啐啄の機を以て後學を接得した。或る時學徒に說法して云ふのに、凡そ佛道を修せん程の者は、師家が開示する其の端的を辨見する眼を具へ、能く其の要處に契ふ作用が有つてこそ、始めて以て眞の禪者と稱し得べきだ。母啄せんと欲して、子啐することを得ず、子啐せんと欲して、母啄することを得ざるやうでは駄目なことで、何でも因

緣が熟して、啐啄同時に行はるゝやうで無くてはいかぬと。すると一僧あり、それなれば和尚さん、母啄し子啐す、師資の機緣がピッタリ相合ふた時、母なる師家の方に、どのやうな所得がありますかと問ふて出た。鏡淸、それは好い事を聽いたものだと、啐啄兩邊に墮せず、賓主二者に涉らさる第一機上から答へた。そこで今度は其の僧、子啐し母啄す、この時子なる學人の方に、どのやうな所得がありますかと問ふ。これに對して鏡淸は、其の時は本來の面目現前だと、師資の玄機、妙契相通ずる底を以て答へた。凡そ鏡淸が啐啄の機を擧揚する、語路妙密、體裁孤危、實に斯の如きものが有る、本則の僧も亦是れ鏡淸門下の客で、卽ち家風に應じて、啐啄の機を問ふて來たものであらう。

「擧す。僧、鏡淸に問ふ。學人啐す、請ふ師啄せよ。」これは所謂藏鋒問で、卽ち豫め鏡淸の當處を看込んで問ふて來たのである。

學人といふたは勿論問者自身のことで、愚僧は今日まで隨分策進勇勤して功夫純熟致した積りでありますから、和尚願はくは一つ愚僧を勘驗して見て下さいと云ふ。

「淸云く、還つて活を得るや、也た無や。」鏡淸は、よし望みとあらば、一啄してもやらうが、殼の中から死面下げて出て來るのでは無いかと云ふ。

「僧云く、若し活せずんば、人に怪笑せられん。」僧もさるもの、負けては居らず、活きて居らないで何んとしませう。和尚の一啄で死んだとあつては、それこそ愚僧も和尚さんも俱に世間の笑ひ草に成りますよ。よく〳〵愚僧の活處にお目を留めて御覽下されと云ふ。圜悟は「天を撑へ地を拄ふ」と著語して、這僧の、人に怪笑せられんなどと答へたところは、天を撑へ地を拄へる程の力ぞと揶揄した。

「清云く、也た是れ草裏の漢。」何んぢや、ムサ〳〵しい草間に居る奴の癖に、啐啄同時はまだ〳〵思ひも寄らぬと貶し去つた。そこで圜悟は「果然」、言はぬことぢや無いと著けた。

一體悟つた積りだから試めして下さいなどと、學人の方から持ち出すなどいふことは、禪家に有るべき次第のもので無いのみか、また弟子に賴まれて始めて氣がつき、一つ試めしてやらうなど云ふやうなタワケた師家が、叢林に在るべきもので無い。鄧州和尚の如きは、「實にハヤ「碧巖」中の大難則ぢや。面白いと云ふは、コノ則、擧揚するも惜しい」など云ふけれども、我が觀る所を以てすれば、本則の如きは、鏡清ほどの宗師として、當時そう重きを措かれた問答では無かつたと思はる。

古佛有二家風一。對揚遭二貶剝一。子母不二相知一。是誰同啐啄。啄。覺。猶在レ殼。重遭レ撲。天下衲僧徒名邈。

「古佛、家風有り。」古佛とは、佛陀以來歷代の祖師に共通の言葉であるが、その世世代代の古佛は、各自特殊の門庭を立て、家風を存して居る中に、この鏡清和尚は、所謂啐啄の機を以て、その一家の本領と作して居る。

「對揚、貶剝に遭ふ。」對揚とは酧對擧揚の義で、卽ち師匠が弟子に應對して、宗旨を擧揚すること。貶剝とは、けなしはぎとると云ふ義で、此處では、耕夫の牛を驅り、飢人の食を奪ふ底、卽ち鏡清和尚が、僧に向つて、也た是れ草裏の漢と一喝し去つて放過せず、手に一物をも持たせぬ手段を指して云ふのである。

「子母相知らず、是れ誰か同じく啐啄す。」內から子鳥が啐する、外から母鳥が啄する、自然の妙契、無作の靈機、只だ自知するに

在るのみ。師匠だからといふて、故意に弟子を悟らせることも出來ねば、弟子だからといふて、強いて師匠に悟りの證明をして貰ふわけにもゆかぬ。圜悟は此處に「母啄すと雖、子の啐を致すこと能はず。子啐すと雖、母の啄を致すこと能はず。各々相知らず」と著語して居るけれども、實は母啄すと雖、子の啐を致すこと能はず、子啐すと雖、母の啄を致すこと能はずと云ふことの如きは、古今の叢林に於て、殆んど毎日見るところの事實であらう。

龍潭禪師は、壯時道悟禪師の左右に服勤した。一日師の道悟に向つて、「某甲こなたへ參りましてから、一向に心要の御指示を蒙りませぬが、如何で御座いませう」と尋ねると、道悟は「そなたが來てから、嘗て心要を指示せなんだことは無いと思ふが」と云ふ。すると龍潭は「何處で御指示が有りましたらうか。」道悟が應ふるのに、「そなたが茶を擎げ來れば、俺はそなたの爲に之を接ける、そなたが食を進むれば、俺はそなたの爲に受ける。そなたが作禮すれば俺も會釋する。到る處に心要を指示して居るではないか」と云ふ。羅漢和尚が、僧の來るを見て、イキナリ拂子を竪てゝ之れに示すと、僧は禮拜した。すると羅漢は僧に向つて、何を見て作禮するのかと云ふ。和尚の御指示を難有感謝したと答ふると、羅漢は其の僧に一打を加へて謂ふのに、「俺が拂子を竪てると、始めて和尚の指示を感謝するなど言ふ癖に、俺が毎日のやうに地を掃いたり、牀を清めたりするのを見ながら、何で禮をいはぬのか」と詰つた。以上は母啄すれども子啐せずといふものゝ好適例である。

法眼陞座、僧有り問ふ、「如何なるか是れ曹源の一滴水。」法眼云く、「是れ曹源の一滴水。」德韶この一語の下に豁然として悟つた。僧あり、廣照大師に問ふ、「淸淨本然、云何か忽ち山河大地を生ず」

と。大師云く、「清淨本然、云何か忽ち山河大地を生ず」と、僧、言下に大悟す。靈山會上、世尊拈華瞬目すれば、迦葉破顏微笑す。是等は皆啐啄同時の機といふものである。南嶽は、六祖大師より、恁麼にして來る物は是れ誰と問はれて、八年の後、下語して云ふ、說似一物卽不中と。すると六祖は、「還つて修證を假るや否や」と云ふ。南嶽は「修證は無きにあらず、染汚することを得ず」と答ふ。之を聞いて六祖は、「祇だ此の不染汚、是れ諸佛の護念する所、汝も亦是の如し、吾も亦是の如し。乃至西天の諸佛も亦復是の如し」と云ふ。汝も亦是の如し、吾も亦是の如し、乃至西天の諸佛も亦復是の如し。眞にこれ子母相知らず、是れ誰か同じく啐啄すと云ふもの、子は啐し母は啄すと雖、計較造作には非ず、無心の妙唱、自然の同氣、按排を假らずして玆に至るものである。香嚴はこの眞致を頌して、「子啐し、母啄す、子覺して殼無く、子母俱に忘して、緣に應じて錯らず、同道唱和、妙玄獨脚」と云ふ。

「啄、覺、猶ほ殼に在り。」鏡淸が還て活を得るや、也た無やと啄すれば、這僧、若し活せずんば、人に怪笑せられんと覺す。イツカナ覺した積りであらうが、この覺は未だ以て子覺して殼無しといふ底のものに非ず、此の間未だ洒落ならず、されば雪竇に、猶ほ殼に在りと云はる。卽ち這邊那邊一轉却を要すといふのである。

「重ねて撲に遭ふ。」果して鏡淸、草裏漢とひどく撲下した。是れ天地一法を立せずと云ふところである。

「天下の衲僧、徒に名邈す。」鏡淸が、草裏の漢と、殼に和して撲破し去つたところが、些子の難所で、這裏天下人の坐在する處であるから、雪竇は悟邊轉却の手段として、天下の衲僧徒に名邈すと、天下の禪僧どもが此の公案を、兎や角と名摸して、名摸に名摸を重ね、徒に六部悟りを事とするのを警むる一句である。

第十七則　香林坐久成勞

垂示云、斬釘截鐵、始可爲本分宗師。避箭隈刀、焉能爲通方作者。針劄不入處則且置。白浪滔天時如何。試擧看。

「垂示に云く、釘を斬り鐵を截つて、始めて本分の宗師爲る可し。」學人の根本無明を截斷し、佛見法見の枷鎖をも解除してこそ、始めて眞の宗師と云ふことが出來る。「箭を避け刀に隈れば、焉んぞ能く通方の作者爲らん。」次ぎは學人の方から云ふ。則ち師家と問答商量する場合に、常に巧辭を設けて急場を逃れたりするやうな事をやるのでは、到底大丈夫の作者となることが出來ない。「針劄不入の處は且らく置く、白浪滔天の時如何、試に擧す、看よ。」針は鐵のハリ、劄は竹のハリのことで、針劄不入とは針を入れる隙間も無い、卽ち言思道絕の處をいふ。其の言思道絕の處は問題としやうにも出來ないが、白浪滔天卽ち萬物去來の場面に當前する時、換言すれば、向上把住の半面は仕方が無いとして、向下放行の半面に立てば如何。サア本則に就て看よ。

擧。僧問香林、如何是祖師西來意。林云、坐久成勞。

香林といふは、澄遠禪師といふて、雲門大師に十八年も仕へ、後ち香林院に住すること四十年、八十歳にして遷化した。この香林和尙に僧有り問ふ、

「如何なるか是れ祖師西來の意。」この祖師西來の意に關する賞酬

は、祖錄にも澤山出て居るもので、一本に輯めてあるだけでも、二百二十を以て算する程であるといふが、這僧も亦その數に洩れず、香林に向つて西來の意を問ふて來た。

「坐久成勞。」如何是祖師西來意を直譯すると、達磨大師が遙々西方の天竺から、東方の震旦へ渡來した本意は、何處に在るやと云ふことに成るが、同時に問旨は、佛法的々の大意とか、禪の本義とか、宇宙玄妙の理とかいふことに在る。然るに香林は之に對して何と答ふるかと聽けば、ナニお前は天竺三界から來たといふ達磨さんを尋ねて居るのか。その達磨さんは、今頃印度に御座つて、久しく坐り込んで、腰が痛いし脚が痺れるし閉口だとでも、言ふて御座るだらうといふ。

無上正眞の大道は天地到る處に普遍して居る。眞實の達磨は、從來する所無く、また去る所無し。現に碧巖の第一則に見ゆる通

り、朕に對する者は誰ぞと問はれて、達磨は不識と答へる、志公和尚は、闔國の人去るとも他亦回らずと謂ふ。眞實の達磨は一切法界の裏に縱横去來し、東西往復して、常恒是の如し。必ずしも、碧眼赤髯の胡僧の西來を待つて、始めて法が東土に傳はるといふものでは無い。玄沙和尚は師の雪峰から、備頭陀何ぞ徧參せざると問はれて、達磨東土に來らず、二祖西天に往かずと答ふ。眞個の達磨二祖に去來が有るか、授受が有るか、生死が有るか。眞個の達磨は印度にすら居らぬ、況んや遙々支那まで來るものでない。眞個の二祖は東土にも居らぬ、況んや遙々西天などへ往く道理がない。何も高い草鞋錢を費つて、四方をウロツキ廻り、何處に法を求めんとするのかと云ふが、玄沙和尚娘生無事の境涯である。所が、這僧自家屋裏の達磨を忘れて、西來の碧眼胡僧を尋ねて居るので、埒の明きやうが無い。臨濟大師は、「五臺山裏に向ふて文

殊を求むるも、早く錯り了れり。五臺山に文殊無し。爾文殊を識らんと欲するや」と言はるゝ。形の上から五臺山裏に向ふて、文殊を拜まうとするのが、そも〳〵の錯り。活きた文殊を識らうと願ふならば、向ふに就て求めて居るのでは仕方が無い。自己に向つて求めてこそ、そこに活きた文殊を拜むことが出來るといふものである。

性空禪師に向つて一僧有り、問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意」と。之に對して、禪師は何と答ふるかと思つたら、若し人が千尺も深い井戸の中に在るとして、一本の繩をも假らずに、此の人を井戸の中から揚げ得たとしたならば、その時お主に向つて、西來の意を即答してやらうと云ふ。すると僧は變な挨拶をしたものだ。近頃湖南の鴨和尚が出世なされまして、いろ〳〵衆人の爲に說法を致されて居ります」といふ。和尚は「沙彌寂子」と喚んで、「這

の死骸を拽き出だせ、看ん」と一喝した。後ちに仰山が此の話頭を耽源に擧似して、「如何にして井中の人を出だし得ん」と問ふと、耽源は「斯の馬鹿野郎、一體誰が井中に在るといふのか」と一本ヤツた。然るにこれが仰山には合點が行かず、更に後になつて、又た潙山に向つて、「如何にして井中の人を出だし得ん」と問ふた。すると潙山が、「慧寂」と仰山の名を呼ぶので、仰山が「ハイ」と應へた所が、潙山は「何だ、ヤツト井戸から上がつて來たではないか」といふ。仰山は、後年常に此の前話を擧して、衆に示して云ふ、「我れは耽源の處に於て體を得、潙山の處に於て用を得た」と。自家本有の達磨は、寸繩を假らずして千尺の井底より上がる、一口に西江の水を吸盡する、無礙自在なものだ。

世說新語第三卷に、「瘦公嘗入佛圖、見臥佛曰、此子疲於津梁」とある。臥佛を見て、この佛さん、山河の旅に疲れて御座るとい

ふ。瘦公は臥佛を見て、長途の旅に疲ると云ふ。香林和尚が、傳法の爲に遙々東土に西來した達磨大師を、今頃は印度に在つて坐久成勞して居るといふのと孰若ぞ。

一箇兩箇千萬箇。　脫却籠頭卸角馱。　左轉右轉隨後來、紫胡要打劉鐵磨。

「一箇兩箇千萬箇」と算へ出したのは、盡天地の人を包括する言葉で、卽ち誰も彼もといふことである。其の人間世界の誰も彼もが、皆悉く

「籠頭を脫却し角馱を卸す」で、口に銜めてある籠のやうなものを取外し、背に負ふた荷物を卸してやつて、馬が自由の身に作つたと同樣に、香林坐久成勞の一語に依つて、無明業識を去り、知

見解會を除くことが出來たと、雪竇先づ以て香林和尚の當處を托上して云ふた。句表面の解釋は、一應右の通りであるけれども、

「種電鈔」にも、「若し直下に會し去らば、便ち佛未出世の時、箇箇銀山鐵壁、祖未西來の時、人々鼻孔遼天にして、本と凡聖の名目、著すべき處有ること無きを管取せん。何ぞ西來を待つて而して後、無明業識を空うし、知見解會を離ると言はんや」と、註してあるやうに、正眼に看來れば、箇々人々雙眼分明、隻鼻直垂、是れ不昧本來人にして、全く第二人無く、前佛も後佛も亦全く別人に非ず。豈に何ぞ千萬個ならんや。

臨濟大師は、常に會下に向つて、念々馳求の心を誡めて云はるゝのに、「爾祖佛と別ならざらんことを要せば、但だ外に求むること莫れ。爾が一念心上の淸淨光、是れ爾が屋裏の法身佛なり。爾が一念心上の無分別光、是れ爾が屋裏の報身佛なり。爾が一念心

上の無差別光、是れ儞が屋裏の化身佛なり。此の三種の身は、是れ儞が卽今目前聽法底の人なり。祇だ外に向つて、馳求せざるが爲に、此の功用有り」と。佛性は心內に向ふて、求めねばならぬ。然しながら其の佛性は、人々が每日喜怒哀樂しつゝある其の一念心上を離れて、別に存するのでは無い。其の一念心上の淸淨光が卽ち吾等眞性の本體である。一年三百六十五日、朝から晩まで、良いの惡いの、欲しいの嫌やのと、一念頭上に取捨分別を逞しうしながら、それでゐて少しも分別の氣ぶらひの無い無分別光が、吾等本有の報身佛である。二六時中千樣萬態の差別界に、差別智を盡しながら、而かも變化自在の妙用を現ずる、是れが吾等觀音化他の境界である。而して以上の三身は、卽今此の處にこの說法を聽いて居る其の人で、念々馳求の心が無ければ、人々皆自己の主人公で、このやうな自受用他受用三昧が出來るのであると云ふ。

「左轉右轉後に隨ひ來る、紫胡劉鐵磨を打たんことを要す。」評中に在るやうに、紫胡禪師は法を南泉に嗣いだ人で、一日劉鐵磨といふ男優りの比丘尼が、禪師を訪ねて來た。すると禪師は「お前さんは鐵の磨臼といふことだが、一體左廻りの磨臼か、右轉りの磨臼か」と問ふ。尼が「私は右轉も左轉も致しませぬ。大丈夫なものです。それよりか、和尙さん、あなた樣こそ、七顚八倒せぬやう御用心下さいませ」と言ふや、言はせも果てず、禪師は驀然一棒を下した。和尙の左轉右轉といふ語句に引きづられて、「顚倒」と著いて來たのを、「左轉右轉隨後來」と頌したので、「如何是祖師西來意、坐久成勞」の問處や答處に就て、語言に隨ふて轉動し來らば、紫胡禪師が劉鐵磨を痛打したやうに、棒頭の手段を用ゆべきであるといふのである。

第十八則　忠國師無縫塔

擧。肅宗皇帝問忠國師、百年後所須何物。國師云、與老僧、作箇無縫塔。帝曰、請師塔樣。國師良久云、會麽。帝曰、不會。國師云、吾有付法弟子耽源、却語此事。請詔問之。國師遷化後、詔耽源問此意如何。源云、湘之南潭之北。雪竇著語云、獨掌不浪鳴。中有黃金充一國。雪竇著語云、山形拄杖子。無影樹下合同船。雪竇著語云、海晏河清。瑠璃殿上無知識。雪竇著語云、拈了也。

「擧す。肅宗皇帝、忠國師に問ふ、百年の後所須何物ぞ。」肅宗は、玄宗の第三子にして、代宗の父に當る。忠國師とは、慧忠國師のことで、上元二年、肅宗に迎へられて、宮中に入り、肅宗は國師を待遇するに師の禮を以てし、崇重最も努めた。然るにこゝに肅宗とあるは代宗の誤りであつて、忠國師、老を病んで、命旦夕に迫つた時、代宗一日國師を見舞ひ、百年の後求むる所が有らば、今の中に言ふて置かれよ。望みの如くして參らせんといふ。

「國師云く、老僧が與めに箇の無縫塔を作れ。」老僧此の期に臨んで今更何も望むところは無いが、只だ卒塔婆一基を建てゝいたゞきたい。それも大工や石屋の手に係らぬ塔で、縫目の無い天人の衣のやうな箇の無縫塔で御座ると。サア箇の無縫塔、是れ什麼ぞと看ねばならぬ。玄沙和尚が、一日師の雪峰の伴をして遊山をした。雪峰がいふのに、「此の一片地を長生の地としやうかと思ふが何うか」。玄沙は「結搆です、此處に一つ無縫塔を建てやうでは御

座いませぬか」と答ふ。そこで、雪峰が地面を測量する風を作すと、玄沙は、「それも可いですが、私ならばそうは致しませぬ」と云ふ。雪峰が、「然らばそなたは何うしやうといふのか」と問ふと、玄沙は、「早や無縫塔が出來上がりました」と云ふ。すると、雪峰は「結搆々々」と印可した。この玄沙の無縫塔と忠國師の無縫塔と是れ同歟、是れ別歟。

「帝曰く、請ふ師、塔樣。」すると代宗は、其の無縫塔の圖案でも有らば、頂戴したいと云ふ。代宗、國師の難題に會ふて、一矢相酬いた積りか。

「國師良久うして云く、會す麼。」釋宗演老師は、此の良久を究めるのが、一つの調べ事であると謂はるゝ。サア、此の良久は、帝の「請ふ師、塔樣」の當處を認めた意味の良久か、それとも帝に向つて何か反省を求むる爲めの良久か。

「帝云く、不會。」帝は正直に不會と言はるゝ。

「國師云く、吾に付法の弟子耽源と云ふものあり、却つて此の事を諳んず。請ふ詔して之れに問へ。」弟子の耽源がよく心得て居りますから、あれから御聽取り下されませと國師はいふ。耽源といふは耽源山の應眞禪師のことである。

「國師遷化の後、帝、耽源を詔して、此の意如何と問ふ。」やがて忠國師は遷化した。そこで代宗皇帝は耽源を召して、塔樣如何と問はれた。

「源云く、湘の南、潭の北。」湘の南、潭の北と云ふも、實は已むを得ずして言ふたまでのことで、這裡元來方所が無い。サア一基の無縫塔が俄然湘南潭北の天地に擴がつて來た。而かもこの湘南潭北の天地は、大小の量に非ず、廣狹の際にも非ざる無邊の風月である。

「雪竇著語して云く、獨掌浪りに鳴らず。」これは擊節の法と云ふもので、雪竇が手拍子合はせて言ふ、見事々々、此處は獨狂言ではいかぬ。國師が耽源を引出す、耽源が詔命に依つて出て來る。國師ばかりでも、耽源ばかりでも成らぬ、國師耽源合作の處で、始めて無縫塔の全貌が現前し來つたといふ。

「中に黃金有つて一國に充つ。」而してこの湘南潭北の遍一切處には黃金が一パイ充滿して居るといふが、是れ什麼の譬喩ぞ。直ちに是れ人々自家屋裏の黃金世界で、箇々這の裡に日用光中現行三昧して居るのである。卽ち所謂如來の本地法樂といふもので、假令文殊普賢でも、釋迦彌勒でも、到底窺ふことのならぬ自己特立の遍法界、禪では之れを主中の主と謂ひ、佛の恩も、祖師の力も、天神地祇の御蔭も蒙らぬ自受用の境界で、卽ち之を指して、中に黃金有つて一國に充つといふたのである。

「雪竇著語して云く、山形の拄杖子。」耽源和尙は、黃金有つて一國に充つるなどと云ふも、それは山から切り出したまゝの拄杖子で使ふにも使はれず、用ひやうの無い黃金だと雪竇は貶し去つた。用ひやうの無い物は價のつけられぬ物だ。世間何物が最も貴しと問へば、之れに對へて、死猫兒頭最も貴しと云ふ。畢竟價の附けられぬ物こそ一番貴い。抑も法身の境界に價がつけられるものか何うか。耽源は謂ふ、黃金有つて一國に充つと、雪竇は謂ふ、山形の拄杖子と。

「無影樹下の合同船。」影が無い樹といふから、本性空寂の境界で、合同船とは、乘合船のこと、卽ち頭々顯露の合相だ。されば無影樹下の合同船と通じて云ふときは、一切の相を離れて、一切の相に卽すといふことに成るから、卽ち實相無相の當體である。この無影樹下の合同船に乘合はして、人々が本地の風光裏に遊山玩水

する、而して是れが取りも直さず吾等日常の娑婆生活に外ならぬ。

「雪竇著語して云く、海晏河清」海晏河清と云ふは、一路平安といふことだ。即ちこの乘合船は實相無相の船だから、航海無事なものだと云ふ。佛言ふ、「實相無相、所謂是の實相は、即ち是れ非相。太虛空の如く一形相無し。若し實相を悟らば、實相に執著すべからず」と。既に實相に執著せず、また非相に執著せず。何處に往くとして可ならざらん。海も穩か、河も濁らず、船路は安泰であるといふ。

「瑠璃殿上に知識無し。」そこで其の無影樹下の乘合船は、一體何處を指して往くのかといへば、海路を經て瑠璃殿といふ佛土の莊嚴裏に著く。然るに其の碧玲瓏たる玉殿高樓には、識り人が一人も無いと云ふ。變な話だが、實は是れが眞實正銘の事だ。無縫塔といふ瑠璃殿上には、有りと凡ゆる者皆居る、居るには居るが、所謂相逢ふて相知らず、共に住して名を知らずで、相逢ふて見れば只一人だから、知る者と知らるゝ者との別は無い。識ると識らるゝとの能所が無い。昔、曹山和尚に僧有りて問ふ。「眉と目と相識るや也た無きや」。曹山は「相識らず」と答へた。すると僧が云ふに、「什麼が爲に相識らずや」と。「同じく一處に在るが爲なり」と和尚は應へる。僧が「恁麼ならば則ち相分れずや」と再問すると、之に對して曹山は「眉且つ是れ目ならず」と一拶した。實に好問答である。眉と目とは勿論一つ物では無い。同じく一處に在るが爲に、互に相識らずと云ふ。然しながら此の相識らずが最も相識ることである。眉と目との間の消息に兩般は無い。無影樹下の合同船に乘合はした者も互に相識らず、瑠璃殿上に上つて見ても、相識る者は一人も無い。しかし相識らずと云ふのは、能く相識ることである。地藏和尚は「知らず是れ最も親切」と云ふ。無

縫塔の世界は人我一枚だ。玄沙の所謂因汝得拜我とは、蓋しこの事を謂ふ。

「雪竇著語して云く、拈了也。」雪竇は最後に「拈了也」と著語した。これで無縫塔が立派に建設された。結搆々々と喜びを述ぶるのである。

無縫塔、見還難。澄潭不許蒼龍蟠。層落落。影團團。
千古萬古與人看。

「無縫塔、見ること還つて難し。」大涅槃經長壽品に「迦葉菩薩、佛に白して言ふ、世尊、譬へば闇中樹有りて影無きが如し。迦葉、汝樹有つて影無しと言ふべからず、但だ肉眼の見る所に非ざるのみ。善男子、如來亦爾り。其の性常住、是れ不變易。智慧の眼無くしては見得る能はず、彼の闇中樹影を見ざるが如し」とある。如來は肉眼の見る所に非ず、智慧の眼無くしては見得る能はず、彼の闇中樹影を見ざるが如しと、釋尊は言はるゝ。無縫塔亦然り。此の無縫塔は、法界に脱體全露して、元と影迹無く、形象を絶したものであるから、塔内に在つて無縫塔を見やうとしても、眼、眼を見ず、水、水を洗はず、金、金を換へず、指、指を指さずと謂ふやうに、如何にしても無縫塔を見ることが出來ない。魚の水中に在つて水を見ること能はざるも亦此の理に外ならぬ。歸するところ、寒山の言ふ眼中の眼、燈外の燈を俟つて、始めて見得る底のものである。

「澄潭には許さず蒼龍の蟠ることを。」これは忠國師の謂ふ無縫塔を蒼龍に譬へて、この龍が湘の南潭の北、洪波浩渺、白浪滔天の處に、昇天の勢を作して居ると言はんと欲するので、代宗が塔樣

などと、之れを谿潭の止水に滯る凡龍に擬して居る間に、何ぞ料らん耽源和尚は、忽ち忠國師の無縫塔を驅つて、之を湘南潭北の風雲に乘ずる一箇の活龍たらしめ、乾坤一切處に獨露せしめたと云ふのである。然らば其の無縫塔の形貌は如何といふに、

「層落落。」「種電鈔」に「此れは是れ雪竇己眼を出だして一箇の無縫塔を形容し、有頂を出過して、高しと爲さず、十虛を含容して、廣しと爲さず」と註してあるが、之を以て十分とする。

「影團團。」これも「種電鈔」に「刹塵に影現して、環の端無きが如く、洞徹無際にして聲も無く、臭も無し」と註してある。要するに層落落も、影團團も、無縫塔が天地法界に彌漫して、形象の尋ぬべき無く、影迹の追ふべき無きを云ふたのである。

「千古萬古人に與へて看せしむ。」この廣大莊嚴なる無縫塔は、空劫已前より盡未來際に至り、實相無相の域に層落落、影團團として顯現して居る。しかし之を見んと要する時は、還つて是れ見難し。智慧の眼無くしては見得ること能はず、闇中樹影を見ざるが如しと佛は言はるゝ。また洞山和尚は「無情說法不思議、若し耳を將て聞かば、聲現せず、眼處聲を聞いて、方に知ることを得ん」と言はるゝが、この無縫塔は、若し眼を將て見れば、色現せず、耳處色を見て、方に知ることを得んと云ふものであらう。

第十九則　俱胝一指頭

垂示云、一塵擧大地收、一花開世界起。只如塵未擧花未開時如何着眼。所以道如斬一綟絲、一斬一切斬。如染一綟絲、一染一切染。只如今便將葛藤截斷、運出自己家珍、高低普應、前後無差、各各現成。儻或未然。看取下文。

「垂示に云く、一塵擧つて大地收り、一花開いて世界起る。只だ、塵未だ擧らず、花未だ開かざる時の如きんば、如何んが眼を着けん。」經文の中に須彌、芥子を容れ、芥子、須彌を容るといはれてあるが、一小塵砂が擧つても、其の一小塵砂の中に能く大地を收め盡くす。路傍の一草花が開いても、既に天地萬物の春を知る。こゝを一塵一佛國、一花一如來と、大智禪師は註して居る。然るに塵も起らず花も開かざる混沌未分の時如何と、正眼に看取せねばならぬ。「所以に道ふ、一綟絲を斬るが如し、一斬一切斬。一綟絲を染むるが如し、一染一切染」。一斬一切斬とは、一束の絲を斬るのに、一絲切れると同時に、一束はザクリ切れて仕まふといふので、是れは頓悟に譬へて、一旦根本の無明を截斷すれば、同時に一切の妄見煩惱を離るゝことが出來るといふのである。一染一切染とは、一束の絲を染むるのに、一絲染まると同時に、一束が染まつて仕まふといふので、是れは頓修に譬へて、清涼大師の心要中に、「心心佛を作さば、一心として佛心に非ざるは無し」といふてあるが如く、一旦自己本分上の事を悟れば、同時に生死涅槃、煩惱菩提を悟り得といふのである。「只だ如今、便ち葛藤を將つて

截斷して、自己の家珍を運び出せば、高低普く應じ、前後差ふこと無く、各各現成せん」。只だ今に於て、文字言句を離れ、其の上一切の思慮分別を捨て、巖頭の所謂自己の胸中より流出した自家屋裏の一物を持ち出さば、上下自在、縱横無礙、始めて能く佛法の眞義を會得することが出來やう。「儻し或は未だ然らずんば、下文を看取せよ」。儻し未だ其の境界に至らざる者は、この俱胝一指頭の禪を參取せよ。

擧。俱胝和尚凡有所問、只竪一指。

この俱胝和尚といふ人は、三十年間も「俱胝佛母陀羅尼」を誦して、悉地を祈つて居つた爲に、俱胝和尚と呼ばるゝに至つた。然るに一日住庵の時、實際といふ比丘尼が尋ねて來て、庵室に這入つたものゝ、笠も下ろさず、錫杖を持つたまゝ、和尚の禪牀を三遍遶つて、「道ひ得ば笠を下ろさん」と、三度も云ふたが、俱胝つまり切つて答が出來ぬ。そこで尼は便ち去らうとしたから、和尚はもう日が暮れかゝつた、此處に一宿して歸りなさいと云ふて留めた。すると尼は又た「道ひ得ば卽ち宿せん」といふ。然し俱胝は玆でも亦答ふることが出來ぬ。そこで尼さん到頭往つてしまつた。尼の去つた後、俱胝慨然として歎じて言ふ、吾大丈夫の形を作しながら大丈夫の氣無くして、一尼僧の爲に辱しめらるると、卽ち此の己躬の大事を明らめたいと思ひ、庵室を捨て、四方行脚に出かけやうと決心した。然るに其の夜、夢に山神のお告げがあつて、此の庵を棄てゝ去るには及ばぬ、今に肉身の菩薩が來て、和尚の爲に說法してくれるであらうと云ふのであつた。果して其の翌日、天龍和尚が來庵したから、俱胝和尚は禮を厚うして迎へ

入れ、具に實際尼との一伍始終を物語つた。すると天龍和尚は一語も發せず、只だ一指を竪てゝ示した。俱胝和尚忽然として大悟したと云ふ。俱胝臨終の節、自ら云ふ、吾天龍一指頭の禪を得て、平生用ひ盡さずと。

「擧す。俱胝和尚、凡そ所問あれば、只だ一指を竪つ。」俱胝和尚の禪風は實に獨自越格だ。この人は誰が來て何と尋ねやうが、常に一指を竪て、佛法的々の大意も、祖師西來の意も、何も彼も此の一本の指にて學人を接化したといふが、元來禪の得悟は知的分別を離れて、萬物存在の眞締に徹底するの義で、此の萬物存在の眞締なるものは、小にしては一指の上にも現はれ、一毛の裏にも藏くれる。而して此の得力の處は、應に宇宙一切のものに渉つて用不盡なるべく、俱胝和尚が、天龍一指の禪に徹底して、這の獨特の禪法を以て其の生涯を一貫したに不思議は無い。

圜悟禪師は、俱胝指頭禪の當處を拈評して、「會も也た恁麼にし去り、不會も也た恁麼にし去り、高も也た恁麼にし去り、低も也た恁麼にし去り、是も也た恁麼にし去り、非も也た恁麼にし去る」と云ふてあるが、これは石室行者が、僧の來るを見て、拄杖を拈じて、「過去の諸佛も也た恁麼、現在の諸佛も也た恁麼、未來の諸佛も也た恁麼」といふたのと、同一模範に出でたもので、是も也た恁麼、非も也た恁麼、汝も如是、我も如是、乃至前佛も後佛も復亦如是と、佛事門中一法を捨てず、一切事一切處に於て、それをそれと標榜して至道の端的を擧揚する處に、指頭禪の宗要が存するのである。圜悟は、更に進んで「一塵纔かに起つて、大地全く收り、一花開かんと欲して、世界便ち起る。一毛頭の獅子、百億毛頭に現ず」と評し來つたが、これは「華嚴經」に所謂一切の中に一を知り、一の中に一切を知るを演繹したもので、禪は之れ

を萬法一に歸す、一何れの處にか歸すと云ふ。此の宇宙絶對一を、眞に我物として受用するのみならず、更に我れ自體が此の宇宙絶對一と成つて、これを一機一境の下に活現せしむる處に、ここに亦俱胝指頭禪の妙諦が在り、臨濟の喝、德山の棒、更に黄檗の所謂諸方の老宿盡く我が拄杖頭上に在りといふもの、馬祖の拂子を竪つる、皆同工異曲と謂ふものである。

天龍俱胝指頭禪の宗意は、取りも直さず一法究盡といふことに在る。一法究盡とは、道元禪師の「正法眼藏」「畵餅」の卷に「このゆゑにいはく、一法纔通萬法通。いふところの一法通は、一法の從來せる面目を奪却するにあらず、一法を相對せしむるにあらず、一法を無對ならしむるにあらず、無對ならしむるはこれ相礙なり。通をして通の礙なからしむるに一通これ萬通なり、一通は一法なり、一法通これ萬法通なり」と云はれてある如く、一法纔通萬法通とは、一法通と云ふに同じく、即ち是れが一法究盡の的意である。諸本の釋する所に依るに、一法纔通萬法通といふは、一法をだに明らめ得れば、此の理諸法に亘りて相通ずと云ふのではなく、一法が萬法にてあり、萬法が一法なる道理をいふので、一法に通ずれば、此の力を以て餘の諸法にも通ずべしといふのではない、一法の從來せる面目を奪却するに非ずとは、一法の相を泯して萬法に融通すると謂ふのでは無く、一法有りながら通ずることを云ふ。されば一法を相對せしむるにあらず、無對ならしむるにあらずとは言はるゝ。通ずといふとも別に所通無く、一切の諸見を離れて無礙自在なるとき、一通是れ萬通なり、萬通是れ一通である。一通は一法なりとは、諸佛は諸佛の一法通にして、殘る一法無く、諸物は諸物の一法に通じて、殘る一法無きを謂ふ。一法通是れ萬法通なるとき、盡界盡時また剩法無しと云ふてある。

圜悟禪師が、評中に圓明禪師の語として、「寒する則ば普天普地寒し、熱する則ば普天普地熱す」と引用してあるのも、畢竟一法究盡の底裏を云ふたに外ならぬ。

これは固より正當の得悟といふには當らないけれども、禪觀の十一切處と云ふものがある。卽ち萬物を十の一切として觀ずる方法で、十とは地水火風空青黃赤白光を云ひ、十の中何れかに一切を纏めて觀ずるのである。例へば世界を青の一色として觀ずれば、我他彼此の區別無く、何も彼も青の一色として觀念を之れに集中する。世界を火と觀やうとするなら、主觀客觀の別無く、四方八面炎々たる火の世界と見て心を之れに統一する。總て一を以て一切を攝する觀法で、固より天龍俱胝の指頭禪とは、其の眞趣を異にするものが有るけれども、是れ亦物を心に攝する萬法唯識の實觀である。

「對揚深愛老俱胝。宇宙空來更有誰。曾向滄溟下浮木。夜濤相共接盲龜。」

「對揚深く愛す老俱胝。」福本に、今時の學者に對して、古時の人を揚ぐと有り、言者、雪竇が今時の學者に對して、古時の俱胝を揚げたといふので、古人の酬對擧揚多しと雖、就中我は只だ俱胝和尙を愛すとなり。何を以て愛するかとならば、

「宇宙空じ來る更に誰か有る。」空じ來るとは、俱胝和尙が、山河大地、四維上下、今古東西、佛も法も、心も性も、盡く那一機上に解決する處を云ひ、斯の如く一指頭に全收し來つて、大地また一物の存する無く、また一衆生の度すべき者無きに至つたと云ふのである。天桂禪師が、此の底意を解して、大地無飢人、滿瓶傾不出といはれたは、洵に適語であると思ふ。

「曾つて滄溟に向つて浮木を下す、夜濤相共に盲龜を接す。」この二句は、人身の受け難きこと、佛法の聞き難きことを示す爲の譬喩であつて、此の盲龜浮木の譬喩は、「涅槃經」にも「法華經」にも、出て居るが、昔、大海に一匹の盲龜が居た。この龜は普通の兩眼が缺けて居て、只だ腹の下に一つの眼があるのみで、不自由極りなきものであつた。然るに幸にも、一つの孔のある板片が流れて來たので、それに取附いて腹の眼を、その板片の孔に當て、ヤツト天日を拜むことが出來たと云ふのである。卽ち俱胝一指頭の禪は、譬へば暗夜の滄溟に向つて孔木を投じ、盲龜を接するが如きもので、業界の中に浮沈する暗昧なる衆生に向つて、這の本分の一著子を下し、之をして死海を出離し、彼岸に達せしむるものだと、俱胝の禪法を讃歎して云ふたのである。

第二十則　龍牙西來無意

垂示云、堆山積嶽、撞墻磕壁。佇思停機、一場苦屈。或有箇漢出來、掀飜大海、踢倒須彌、喝散白雲、打破虛空、直下向一機一境、坐斷天下人舌頭、無爾近傍處。且道、從上來是什麽人、曾恁麽。試擧看。

「垂示に云く、堆山積嶽、撞墻磕壁。佇思停機せば一場の苦屈。」山に堆く嶽に積み、墻に撞き當り壁に行き當るといふので、宇宙の大法は山河大地に充塞して居ることを云ふ。宇宙の大法は、我等の眼前に斯く廣大に展開されて居るに拘はらず、徒に思慮分別を勞したり、疑惧躊躇するやうなことがあれば、啻に天地の眞理

を吾が物とすることが出來ないのみか、萬事が苦勞の種に成る。

「或は箇の漢有つて出て來つて、大海を掀飜し、須彌を蹋倒し、白雲を喝散し、虛空を打破して、直下に一機一境に向つて、天下の人の舌頭を坐斷せば、爾が近傍の處無けん。」こゝに大力量の巨漢出て來つて、大海を顚覆し、洪嶽を蹴倒す、即ち人人の有見色見を掃盡し、白雲を吹き飛ばし、虛空を打ち壞す、即ち更に人人の無見空見をも破却し、斯くして或は一機に依り或は一境に依り、天下の人をして有無を言はせぬと云ふことになつたら、それこそ學人共は近傍へも寄りつけぬことにならう。「且く道へ、從上來是れ什麼人か曾て恁麼なる。試に擧す、看よ。」然らば昔から果して何人が其のやうな事を爲し得たか、試に本則の公案に就いて實參せよ。

擧。龍牙問翠微、如何是祖師西來意。微云、與我過禪板來。牙過禪板、與翠微。微接得、便打。牙云、打卽任打、要且無祖師西來意。濟云、與我過蒲團來。牙取蒲團過與臨濟。濟接得、便打。牙云、打卽任打、要且無祖師西來意。

「擧す。龍牙、翠微に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。」龍牙禪師は湖南の龍牙山に居られた居遁和尙のことで、法を洞山悟本大師に嗣いだ。又翠微は無學禪師と云ふて、丹霞天然禪師の法嗣である。この時の龍牙は祖師西來意に就て、多少自得する所が有つたらうけれども、何と云ふとも未だ所謂習學の餘氣を脫し得なかつたが、それでも相當の自負自信を以て諸方勘驗の行脚に出かけ、

先づ第一に翠微和尚を選んで問題を提起した。曰く如何なるか是れ祖師西來の意と。

「微云く、我が與めに禪板を過し來れ。牙、禪板を過して、翠微に與ふ。」すると翠微は一トロも祖師西來の意などに觸れず、其の禪板を持ち來れと命ずる。禪板とは坐禪の疲れを慰する爲、顎を支へるに用ふる道具である。龍牙は大人しく禪板を持つて來て翠微に渡した。

「微、接得して、便ち打つ。牙云く、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」翠微は禪板を受け取るや否や、イキナリ其の禪板で龍牙に一打を喰はした。すると龍牙は、お打ちになることは、いくらお打ちになつてもいゝが、それでは一向祖師西來の要旨は出て參りませんと云ふ。

「牙、又臨濟に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。濟云く、我が

興めに蒲團を過し來れ。牙、蒲團を取つて臨濟に過與す。濟接得して、便ち打つ。牙云く、打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意無し。」龍牙は翠微を去つて、今度は臨濟に往き、臨濟に向つて又候祖師西來の意如何と問ふ。すると臨濟も翠微同樣、一語西來意に及ばず、直ちに其の蒲團を持ち來れと命ずる。龍牙は懲りずまに蒲團を取つて臨濟に渡した。臨濟は蒲團を受取るなり、其の蒲團で龍牙を打つた。龍牙は又打たれた。しかし龍牙は相變らず、お打ちになることは、いくらお打ちになつてもいゝが、それでは一向に祖師西來の要旨は出て參りませんと、前と同一轍に出づる。

こゝを圜悟は「曹谿の波浪、如し相似たらば、限り無き平人も陸沈せられん」と著語してあるが、曹谿とは六祖大師のこと、波浪とは法脈のことを云ふたので、翠微も臨濟も同じ曹谿の法脈を

嗣ぐ者であるから、其の家風も其の手法も似たり寄つたりのものだと思ふたら、それは大間違ひで、翠微が禪板を過し來れと云ふたのと、臨濟が蒲團を過し來れと云ふたのとは、是れ二老銘々の得處から流出し來つて蓋天蓋地したもので、翠微には翠微の境界が有り、臨濟には臨濟の天地が有る。そこを相似底と見るならば、地上限り無き人間は、皆地下に溺沒して仕舞ふと云ふので、即ち圜悟はこの句下に翠微臨濟の機を奪ふたのである。

翠微は龍牙に向つて、我が與めに禪板を過し來れと云ひ、臨濟は我が與めに蒲團を過し來れと云ふ。此處に祖師西來意は立派に出て居る。それを何を以て、龍牙は祖意無しと云ふのか。畢竟不知不識自分自身で無にして了つて居るが爲で、翠微の禪板、臨濟の蒲團、分明に是れ活祖意である。大證國師は肅宗皇帝から、「如何なるか是れ十身調御」と問はれて、イキナリ起立して云ふ、「還

つて會すや」と。帝は「不會」と應ふると、國師は「老僧が與に淨瓶を過し來れ」と云ふ。佛は何かと問はれて、國師は其の淨瓶を持ち來れと答ふ。國師の答處は決して皇帝の問端に負かぬ。自らそれに向つて自らそれと爲したまでのことである。その大證國師が肅宗皇帝と宮中を散歩した時、石製の獅子を指して、「陛下、這の石獅子奇なり、敢て一轉語を下だせ」と云はれたのも、亦佛は何かと問はれて、其の淨瓶を持ち來れと答へたのと、其の奥旨を同うするもので、國師が這の石獅子奇なりと云はれた時は、祖師西來意は、國師の眼底、只だ此の石獅子に於て明々覿露、餘す所は無いのである。

龍牙は祖師に西來意無し、達磨不來東土、二祖不往西天と、終始この平等一色邊の見處に逗滯して、自由を得なかつた。されば最初に翠微に一打されても、此の一色功中から轉却することが出

來ず、更に臨濟から向上の一路を示されても、依然死水の瞎龍として了つた。雲門に一僧有つて問ふ、「如何なるか是れ法身向上の事」と。雲門は之れに答へて、「お主の爲に向上を道ふことは易いが、第一お主は法身を如何に會して居るか」と反問する。然るに僧は「和尚先づ法身を道ふて見て下され」と云ふ。「夫れは兎も角、お主は法身を如何に會して居るか、先づ道ふて見よ。」そこで僧は已むを得ず「與麼與麼」と、お座なりに法身全露の邊をいふと、雲門は、「這箇は是れ長連牀上學得底。我れ爾に問ふ、法身還つて飯を喫すや無しや」と、何だそんなことは鼻先の學問だ。法身が喫飯送尿する其の當處が、見得ないやうでは駄目なことだと云ふ。龍牙は、法身を與麼與麼と見聞のまゝ片附けやうとする此の僧同然、未だ長連上の習氣を脱して居らぬ。翠微臨濟の兩尊宿は、一重上を以て龍牙に向上の端的を示さんが爲、禪板蒲團と、法身が喫飯送尿する其の當處を看せたのであつた。

この時は龍牙も未だ修行中の一衲僧で、一肚皮の禪を擔ぎ廻つて、自ら得たりとする程度に過ぎなかつた。後年住庵の日、一僧から、「如何なるか是れ祖師西來の意」と問はれて、「石烏龜の解語するを待つて、即ち汝に向つて道はん」と答へたことがあるが、祖師西來意に對する龍牙多年の親參實究が、遂に「石烏龜の解語するを待つて、即ち汝に向つて道はん」に到達したもので、無舌人の解語を俟つて、祖師西來意を道ふてやらうとは、馬祖の「爾が一口に西江の水を吸盡するを待つて、即ち爾に向ふて道はん」と、當さに兩口一舌といふべく、實に確かな境界だ。茲に到つて、龍牙も翠微臨濟と共に連騎同遊の客である。

龍牙山裏龍無眼。死水何曾振古風。禪板蒲團不能用。

只應分付與盧公。

「龍牙山裏龍に眼無し。」この一句に對しては、古來正反對の二說が行はれて居る。其の一は、龍牙發憤して二尊宿を勘驗と出かけたところの機鋒は、龍と稱すべきだけれども、翠微臨濟に第一機上より一著せられて、二老の用處が分からず、自家の七部悟りに終始したは無眼であるといふのと、其の二は一箇の龍牙を讃歎して頌し出だし、之を梵天まで托上したと解するもので、圜悟の評にも「雪竇款に據つて案を結す。他、恁麼に頌すと雖、且らく道へ、意什麼の處にか在る」と、這裡變通の餘地有ることを明かにして居り、大智和尙の如きは、「一向に無眼の會を作す可からず、須らく雪竇の意を領して始めて其の歸を知るべし。雪竇の意は、是れ龍牙を罪して、死水瞎龍を以て死法の會を作すにあらず」と

まで說明して居る。しかし白隱禪師も、之れは雪竇の正眼で、龍牙の悟底を見透しての頌であると言ふて居られる通り、龍牙當時の悟底は、未だ一肚皮裡の禪に過ぎず、之に依つて自在を得たとは謂ひ難い、大事な眼を缺いて居ると解釋するのが正當である。されば こそ、雪竇は龍牙の所得底を見徹して言ふ、

「死水何んぞ曾つて古風を振はん」と、即ち龍牙が一向に西來無意の正位一色邊に滯り、更に臨機一轉の手段無く、空しく死法の會を作すことを貶して、さういふことでは、達磨の眞風を鼓吹するなどは思ひもよらぬと云ふて居る。

「禪板蒲團用ゆること能はず。」斯の如く本分の活處無き爲に、二尊宿にムザ〳〵禪板蒲團を渡して、却つて之れに依つて打著せられ、之れを活用して、自己一段の大事を明かにすることが出來ぬ。そこで雪竇は更に

「只だ應に分付して盧公に與ふべし」と、そんな不用の品なら、乃公の許へお寄越しなさいと云ふ。盧公とは雪竇が盧氏なるが故に、自ら稱して言ふたのである。さて分付して與へよとはいふたものゝ、圜悟もこゝに「也た則ち分付すること不著」と下語してあるやうに、この禪板蒲團は本來受授與奪に渉るものでは無い。道元禪師の言はれた通り、この法は人々の分上にゆたかにそなはれり。放てば手に滿つ、一多のきはならんや。語れば口に滿つ、縱横きはまりなきものであるから、此の那一物は誰に分付して見やうもない。流石の雪竇も弱はり果てた。

這老漢也未得勦絶、復成一頌。盧公付了亦何憑。坐倚休將繼祖燈。堪對暮雲歸未合、遠山無限碧層層。

「這の老漢也た未だ勦絶することを得ず、復た一頌を成す。」この一句は記者の語で、老漢は雪竇を指す。即ち雪竇和尚は前頌を以て拈出したものゝ、尚ほ何とやら未だサツパリと盡きぬ所があるので、重ねて復た一頌を作すと云ふのである。

「盧公に付し了るも亦た何ぞ憑らん。」前きに禪板蒲團を用ゆることが出來ぬのなら、乃公に寄越しなさいとは言ふたものゝ、實はそれを貰つたからとて、今更そんな物を憑みとする譯には行かぬ。

「坐倚將つて祖燈を繼ぐことを休めよ。」蒲團に坐したり、禪板に倚つたりして、大師家然と濟ましして居つただけでは、夢にも佛祖正傳の祖燈を繼承することは成らぬ。世尊拈華、迦葉微笑以來、佛祖的々相承の一大事因緣は、所謂嶮崖に手を撒して、絶後に再び蘇へる底の行業を俟つて始めて了するもので、この大法の相續は、單なる師授紹繼の能くする所で無い。是に於て雪竇は龍牙は

勿論、更に翠微臨濟の見識よりも一枚上を行つて、第一機の行令を爲さんが爲、達磨西來已前の玄境を劈開した。

「暮雲の歸つて未だ合せざるに對するに堪へたり　遠山限り無く碧層層。」そんな薄黑暗に蒲團に坐し、禪板に倚りなどせずに、マア椽先へ出て、この見事な夕暮の景色を見なさい。遠山が山又山と層なり合ふて、暮色蒼然たる裏に、雲が山の方へ歸つて來て、未だ全く山を包み隱さず、片々として半天に浮んで居るさまは、何とも彼とも謂はれないぢやないか。是れが覿露明々の祖師西來意であると云ふ。茲に至つて最早一語の加ふべきものが無い。堪對暮雲歸未合、遠山無限碧層層。圜悟は之を評して、「且らく道へ、是れ文殊の境界か、是れ普賢の境界か、是れ觀音の境界か、此に到つて且らく道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ」と言ふて居る。また白隱和尙は、此の後頌を拈じて、「後頌極めて黃絹幼婦、百則中最妙最玄最第一なり。是の故に明眼の衲僧、天下の老和尙、總て是れ見れども見ず、覷へども破らず、老僧亦誤つて看過し來ること大凡三十年、今老去つて前事を憶ふに、慚汗腋に滴り感淚襟に滿つ」と謂はれて居る。よつて最後に五祖法演の蜀僧を送るの詩一篇を敍して、本則の講述を終らうと思ふ。曰く、相聚淮南四十年、而今歸去路三千、有人若問西來意、水在江湖月在天と。雪竇は謂ふ、堪對暮雲歸未合、遠山無限碧層層と。五祖法演は謂ふ、水在江湖月在天と。

第二十一則　智門蓮花荷葉

垂示云、建法幢、立宗旨、錦上鋪花。脫籠頭卸角馱、太平時節。或若辨得格外句、舉一明三。其或未然依舊伏聽處分。

「垂示に云く、法幢を建て、宗旨を立す、錦上に花を鋪く。」これは師家分上の作略をいふたので、法幢とは佛法の幢旛と云ふを略した語で、印度に於て法を說く時に、旗を高く揚げて標幟と爲したことより、法幢を建つるとは、ツマリ宗風を宣揚すると云ふことに成る。即ち歷代の宗師が衆生濟度の爲に、宗風を宣揚し、佛祖正傳の大法を宣布せらるゝは、是れ錦上に花を鋪くものである。

「籠頭を脫し、角馱を卸す、太平の時節。」次ぎは學人の側から云ふたもので、籠頭角馱の句は第十七則の頌にも出て居る通り、馬の鼻先に嵌めてある籠のやうなものを脫し、負はせた荷物を卸すと云ふことで、即ち情解分別を去り、見聞覺知をも除き得ば、こゝに始めて現實一切を超絕し、歸家穩坐の眞境に到ると云ふのである。「或は若し格外の句を辨得せば、舉一明三。」然れども以上は師家學人として、言はゞ尋常底のものに過ぎず、未だ以て超宗越格といふに足らぬ。更に格外の句を辨得してこそ、始めて本分の宗師といふべく、明眼の禪子と云ふべきである。格外の句とは例へば聲前の一句とも那一句ともいふべきもので、斯かる格外の句を辨得した上根上機の者に至つては、一隅を擧げて三隅を明らめ、一を聞いて十を知る。「其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて伏して處分を聽け。」其の格外の句を辨得出來ぬ者ならば、例によつて

古人の公案に就き、其の開示する所を知るが可いと、本則に導いた。

舉。僧問二智門一、蓮華未レ出レ水時如何。智門云蓮華。僧云出レ水後如何。門云荷葉。

「舉す。僧智門に問ふ、蓮華未だ水を出でざる時如何。智門云く、蓮華」智門禪師は諱を光祚と云ひ、法を香林に嗣いだ。香林の師匠は雲門大師であるから、智門は正に雲門の法孫に當る。其の智門和尚に一僧が、「蓮華未だ水を出でざる時如何」と問ふ。蓮の花が未だ水から出ない時は、之を蓮の花と申したものでせうか、何んと申したものでせうかとは、意は陰陽未分の時、之を天地と云ふを得べきや如何と問ふやうなものである。すると智門は「蓮華」

と答へる。それは、やはり蓮の花サとは、意は陰陽未分の時でも、天地はやはり天地だといふやうなものである。

「僧云く、水を出づるの後如何。門云く、荷葉。」それなら水から出て立派に蓮の花に成つた後には、何と申すべきでせうか。混沌離披して天地開闢した後には、何と云ふべきかと問ふが如きものである。すると智門は、強いて言はふならば荷葉とでも云ふかと答へる。山河大地とでも言ひたければ言ふサと云ふが如きものである。

一體普通の常識から言へば、蓮華がまだ水を出ない時は、荷葉と云ふが本當で、水を出た後は蓮華と云ふが當然であるのに、智門は全く顚倒を以て答へて居る。しかし斯かることは禪に於て大した交渉の有るべき次第のものでない。蓋し本則に於ては、未だ水を出でざる時とは、果して是れ什麼なる時ぞ、水を出でて後と

は、果して是れ什麼なる時ぞと參究するのが眼目で、現に圜悟も評唱の劈頭に於て「且らく道へ、這の蓮花出水と未出水と、是れ一か是れ二か、若し恁麼に見得せば、爾に許す、箇の入處有ることを」と、出、未出、俱に一時の三昧なることを謂ふて居る。詮する所、一則の關鍵實に只だ箇の「時」の一字に在り。人々若し未出の時是れ何の面目、出後是れ何の面目と、顧みて自己に向つて問はゞ、蓮華の時も洒々落々、荷葉の時も洒々落々。

涅槃經に「若し衆生中別に佛性有りと言はゞ、是の義然らず。何を以ての故に。衆生即佛性、佛性即衆生、時の異なるを以ての故に、淨不淨有り」とある。佛と云ひ、衆生と云ひ、皆時の名で、佛と云ふも佛で無く、衆生と云ふも衆生で無く、總じてこれを時と云ふ。諸佛の時は諸佛の時にして、諸佛の法が有り、衆生の時は衆生の時にして、衆生の法が有る。しかしながら諸佛の時と衆

生の時とは別時に非ず、只だ是れ一時のみ。隨つて諸佛の法と衆生の法と別法無く、法の本法は畢竟無法に歸すると云ふが、涅槃經の說く所である。

道元禪師は「正法眼藏」「有時」の卷に於て、「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり」と謂はれてあるが、天地萬物時を離れたものは一物も無い。天も有る時、地も有る時、迷悟凡聖共に有時にして、事相の上の頭々物々が少しも相礙へぬ。時々の一時一時が相礙へぬ。晝が夜を礙へぬ、春の時が夏の時を礙へぬ。藥山云ふ「有る時は高々峰頂に立ち、有る時は深々海底を行く。有る時は三頭六臂、有る時は丈六八尺」と。高々と峰頂に立つ有差別も有時、深々と海底を行く無差別も亦有時、三頭六臂と明王部を現ずるも有時、丈六八尺と金身佛を現ずるも亦有時、道元禪師の所謂有はみな時なりとは、時有れば法有り、時を離れ

て法有ること無しと謂はるゝのである。

本則に於ける智門の所謂蓮華未だ水を出でざる時も一時の現成、水を出でて後も亦一時の現成で、未出水の時、去らず來らず、出水後の時、動かず變ぜず、未出水時が出水後を礙へぬ、出水後が未出水時を礙へぬ。蓮華を呼んで荷葉となすも可、荷葉を呼んで蓮華となすも可。之を道元禪師は、「物々の相礙せざるは、時々の相礙せざるが如し」と云はるゝ。時に去來の相が無く、法に自他の隔は無い、今の今を離れて復た他時他法有ること無しと云ふので、黃檗の「十二時中一物に依倚せず」と云ふ宗旨も玆に在れば、智門答處の當體も亦玆に在るのである。圜悟は總評中に自問自答して云ふ、或は人有つて自分に、蓮華未出水の時如何と問はゞ、露柱燈籠と答へん。出水の後如何と問はるれば、杖頭日月を挑げ、脚下太だ泥深しと道はんと。是れは畢竟圜悟の力を以て自ら云ふ

ことで、諸人はまた各自の見地に就て法門の實究を爲さねばならぬ處である。

蓮華荷葉報君知。　出水何如未出時。　江北江南問王老。
一狐疑了一狐疑。

「蓮華荷葉君に報じて知らしむ」と云ふも、實は何と知らせやうも無い。と云ふ譯は、蓮花が出水後に荷葉と成つたでもなく、未出水の時に荷葉を呼んで蓮花と爲すのでもなく、一體何を喚んで蓮花となし、何を喚んで荷葉となすか。這裏に到つて、彼の此の之爲すべき限りでない。此の當體脫落の處を諸人に報じて知らしむと云ふのだが、諸人果して合點がゆくか否か。

「出水は未出の時と何如ん。」之はどうしても斯う訓まねば句意が

通ぜぬ。やはり是れは「時」の問題に外ならぬ。本則の場合に、隨分詳悉に亘つて講述して置いたが、更に重複を厭はず申さうならば、圜悟も評中に、「爾且らく道へ、出水の時、是れ什麼の時節ぞ。未出水の時、是れ什麼の時節ぞ」と謂ひ、畢竟蓮華出水と、未出水と是れ一か是れ二かと重ねて問ふたのである。出水と未出とは形影の如く、又前後の歩の如し。時は異れども、時は離れぬ、而して其の時と時とが互に相扞格せぬ。即ち出水の時は出水の時ばかり、未出の時は呑却して顯はれぬ。未出の時は未出の時ばかり、出水の時は影を斂むる。然れども出水の時も時、未出の時も亦時、出水だからと云ふて、時が外から來たのでもなく、未出だからと云ふて、時が餘所へ去るものでもない。前後際斷するけれども、總て一條鐵の時だと云ふが、此の一句の的意である。圜悟は此の一句に對して「分開するも也た好し」と著語して居る。意者、出水は未出の時に同じと云ふもさることながら、或は出水と未出水と分けて見るも亦妙であらう。何故とならば、出水といふも出水の跡無く、未出水といふも亦未出水の跡は無い。然るに此の出、未出は互に相親しいから、同じと云ふも差支無く、分けて見ても碍げは無いと云ふのである。

「江北江南王老に問へ。」サア彼れが蓮華、此れが荷葉と、實は君に報じて知らせやうもない。出水と未出水、是れ同歟是れ別歟と斷案の下しやうもない。愚衲の言句に御滿足が行き兼ぬるならば、ソンヂヨそこらの坊樣達に聞いて呉れと雪竇は云ふ。王老といふのは、支那では王氏、李氏、張氏、趙氏といふ四姓が、掃いて捨てる程多いから、王老と呼び出したのであるが、何處か其の邊の智識といふのである。江北江南と云ふも、是れ亦特定の地を指したのではなく、あちらこちらと云ふ程の意味である。

「一狐疑し了つて一狐疑せん。」江北江南の地に王老師を尋ねて、蓮華荷葉の別を問ふたり、出水未出水の異同を討ねたりしても、恐らくは却つてそれからそれへと疑團が累り合つて、涯しも無いことに終るであらうといふので、先づ江南に往いて王老師に、如何なるか是れ蓮華と問へば、南地竹と答ふるかも知れず、江北に李老師を訪ふて、如何なるか是れ荷葉と問へば、北地木と答ふるかも知れぬ。斯の如くして、本を捨てゝ末に趨り、根幹を忘れて枝葉に移ることになれば、結句生涯歸家穩坐の機無きに至るであらう。

第二十二則　雪峰鼈鼻蛇

垂示云、大方無外、細若隣虛。擒縱非他、卷舒在我。必欲解粘去縛、直須削迹呑聲。人人坐斷要津、箇箇壁立千仞。且道是什麽人境界。試擧看。

「垂示に云く、大方外無く、細なること隣虛の若し。」大方外無く、細なること隣虛の若しとは、洞山大師の「寶鏡三昧」に在る「細には無間に入り、大には方處を絶す」と全く其の意を同うするもので、即ち大道の本體は無限大であるから、宇宙外と云ふべき所は無いと同時に、また無限小で、其の微細なること幾んど虛空に近いものである。この無內無外の極致を、老子は「大方無隅」と

謂ひ、「楞嚴經」には「更に隣虛を拆けば、即ち實に空の性なり」と云ふ。實に妙法の法界に周遍するさまを形容したものである。「擒縱他に非ず、卷舒我に在り。」この妙法を吾が物として、諸葛孔明が孟獲を七擒七縱したやうに殺活縱横に、雲が山を呑み、山が雲を吐くやうに卷舒自在に、宇宙の大機を手中に弄するは、即ち他に非ずして我に在り。それは他人の力を借りて然るを得るものでなく、畢竟人人が本有如然の力に依ると云ふのである。「必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく迹を削り聲を呑むべし。人人要津を坐斷し、箇々壁立千仞ならん。」然るに「華嚴經」に「我今ま普く一切の衆生を見るに、如來の智慧德相を具有す。但だ妄想執著を以て、而して證得せず」とあるやうに、我等凡夫は妄想執著の爲に自繩自縛せられ、自ら如來の智慧德相を沒却して居る。然り而して此の妄想執著の粘縛を解き去らうとするならば、言語名相の詮索を止め、他に附和雷同すること無く、顧みて自知自肯する所が無ければならぬ。さう成れば、人人皆生死の苦海を彼岸に渉つて、涅槃の世界に到ることが出來る。「且らく道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試に擧す、看よ。」然らば誰人か果して能く斯の如き境界に到り得る者ぞ。茲に雪峰、長慶、玄沙、雲門諸老の働きが在る。それを看よと、本則の公案に引導した。

擧。雪峯示衆云、南山有一條鼈鼻蛇。汝等諸人切須好看。長慶云今日堂中大有人喪身失命。僧擧似玄沙。玄沙云須是稜兄始得。雖然如此我即不恁麼。僧云和尚作麼生。玄沙云用南山作什麼。雲門以拄杖擲向雪峯面前作怕勢。

「擧す。雪峰、衆に示して云く、南山に一條の鼈鼻蛇有り。汝等諸人、切に須らく好く看るべし。」この一則は、雪峰禪師が其の門下の龍象たる、長慶、玄沙、雲門諸師と共に、一匹の大蛇を拈出して、宗乘の玄旨を詮表すると云ふ筋のものである。南山とは、雪峰山のことであるとも云ふが、別に方處は無い。鼈鼻蛇とは、龜のやうな鼻頭を爲した蛇のことで、單に毒蛇と解すれば可い。さて雪峰は門下の者に向つて、南山に一匹の毒蛇が棲んで居て、之れに嚙まれると、必ず一命を喪ふといふことだが、お前達皆往いて、よく見て來るがよいと云ふた。南山といふは何處、毒蛇といふは什麼。

天桂禪師は「此れ名を借りて、人々に此の事を商量せしめんが爲なり。百丈は之を大蟲と云ひ、趙州は之を喫茶去と云ひ、子胡は此れを狗子と云ひ、臨濟は此れを無位の眞人と云ひ、馬祖は此れを日面佛月面佛と云ひ、洞山（良价）は此れを頭上三尺頸長二寸と云ひ、雲門は此れを乾屎橛と云ひ、洞山（守初）は此れを麻三斤と云ひ、或は拄杖とも竹篦とも、思ふまゝに呼び起して、人々自己の心の事を樣々無量に云ふは、只學人の機發を圖るより外に、決して他事はない」と開示して居らるゝが、畢竟垂示にある大方外無く、細なること隣虛の若き那一物を指して云ふたもので、心と說かず、性と說かず、直下に向上の秘曲を唱へ出だした。圜悟はこゝに「怪を見て怪とせざれば其の怪自ら壞す」と著語して、此の一條の鼈鼻蛇を弄得するの術を吾等に教へる。若し怪を見て、其の怪を取り囃やして騷がず、平氣の平左と捨てゝ顧みぬ時は、其の怪自ら消え失せて仕まふと、即ち本分上より、一法を立せざる端的を道ふた。圜悟は更に力と著けて居る。力とは出力聲也とあつて、例へば失つた物を見附けて、アッ此處に在つたと聲を出

す、則ちアツ此處に蛇が居る、それ見よと云ふ心である。

「長慶云く、今日堂中、大いに人有つて喪身失命す。」大衆中に長慶の慧稜禪師が居つて、師匠は南山に毒蛇が居ると御仰しやいますが、南山どころか、只今此の僧堂の中で其蛇の毒氣に觸れて死んだ者が一人御座いますと云ふ。其の一人と云ふは、師匠の雪峰を指したものか、長慶自身のことか、何れにしても雪峰の用處を知つて同道唱和した。同じ雪峰の會下で、曾て之れと酷似した商量が行はれたことがある。則ち或る時雪峰が座下に向つて、「飯籮裏に坐地して、餓死する人多し。海水邊に坐地して、渴死する人多し」と云ふと、玄沙が直ちに之を引き取つて、「飯籮裏に頭を沒して、餓死する人多し。海水裏に頭を沒して、渴死する人多し」と言ふ。すると雲門は「通身是れ飯、通身是れ水」と拶著する。師匠の雪峰が、飯櫃の中に坐り込んで、餓死する奴が多く、海べりに坐り込んで、渴死する奴が多いのには驚くと云ひ出すと、玄沙は、それ所ではありません、飯櫃の中に頭を突込みながら、餓死する奴が多く、海水に頭を突込みながら渴死する奴が多いのには、更に驚きますよといふ。然るに雲門は、ナアニ其の癖彼奴等は體中(カラダヂユウ)が飯で、體中が水ぢやありませんかと一段上位を往く。雪峰、玄沙は坐地と沒頭とを爭ふ、本則に於ける長慶の所謂大いに人有りて喪身失命すといふ其の處だ。然るに雲門は、却つて飯を見ず水を見ざる末後向上の處を謂ひ、長慶は更なり、雪峰も堂中の誰彼も、悉く一條の毒蛇に成り切つた當處を示した。本則に於て後に説明するが、雲門が拄杖を拈出して毒蛇に擬し、本際を動かさずして、雪峰示衆の機を奪ふた手法と全く其の揆を一にするものである。

「僧、玄沙に擧似す、玄沙云く、須らく是れ稜兄にして始めて得

べし。然も此の如くなりと雖、我は即ち不恁麼、僧云く、和尚作麼生。玄沙云く、南山を用ひて什麼か作さん。」この雪峰と長慶との問答を聞いてゐた大衆の一人が、此のことを玄沙に話した。すると玄沙が云ふに、流石に稜兄だ。稜兄でなくては言へぬ處だ。しかし、自分ならばさうは云はぬと。そこで僧は、それならば和尚は其の場合何と答へられますか。一つ和尚の見處を承りたいといふ。是に於て玄沙は、南山などと餘計ではないか。山河大地、十方世界、蛇の毒氣は到る處に磅礴して居るではないかと云ふ。何處を呼んで南山と作さん、什麼を喚んで三界と作さんと云ふのだ。「從容錄」に「玄沙は大剛、機に當つて父に讓らず。長慶は勇少し、義を見て爲さず」とあるが洵に適評である。

「雲門、拄杖を以て雪峰の面前に擲向して、怕るゝ勢を作す。」雲門は手にして居つた拄杖を、師匠の面前に投げ出して「ソラ蛇だ」

といつて、怕れるやうな格好をして見せた。雲門手中の拄杖子が直ちに一條の長蛇と成つて、天地の間に蜿蜒として居る。圜悟は此處に「他を怕れて什麼か作さん」と著けた。何が怕ろしいぞ。蛇が蛇を怕れてどうするかと云ふ鹽梅。昔、投子和尚に向つて僧有りて問ふ、「那吒太子骨を折つて父に還へし、肉を折つて母に還へす。如何なるか是れ那吒本來身」と。すると投子は、手中の拄杖子を放下すと云ふから、イキナリ手にして居つた拄杖を其處に投げ出して、那吒本來身を露現せしめて見せた。那吒太子は骨肉一切を父母に返上して仕舞つて、幻化の空身に歸した。然るに幻化空身即法身。那吒本來身は天地萬象と少しも相罣礙せぬ。投子の拄杖とも成れば、南山の鼈鼻蛇とも成る。雲門の拄杖子は投子の拄杖子と孰若。

黄龍禪師の法嗣に眞淨和尚といふ人があつて、此の則に徹して

頌せられた。其の頌に、「皷を打ち琵琶を弄す、相逢ふ兩會家。雲門能く唱和す、長慶邪に隨ふことを解す。古曲音韻無し、南山の鼈鼻蛇。何人か此の意を知る、端的是れ玄沙」と、この南山鼈鼻蛇の古曲は、無音韻なる程に、知る人は無いが、此處には知音同士相聚つて、同唱相和し、師學賓主、手合せが揃ふて面白いと、興がつて居るのである。

象骨巖高人不レ到。到者須二是弄レ蛇手一。稜師備師不二奈何一。
喪身失命有二多少一。韶陽知、重撥レ草。南北東西無レ處レ討。
忽然突出拄杖頭。拋二對雪峯一大張レ口。大張レ口兮同二閃電一。
剔二起眉毛一還不レ見。如今藏在二乳峰前一。來者一一看二方便一。
師高聲喝云看二脚下一。

「象骨巖高うして人到らず、到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。」雪峰山下に象骨巖と云ふ巨巖が在り、孤峻險絶にして攀躋を許さぬ。これは雪峰禪師の禪機が、壁立萬仞にして近前し難きをいふ。若し此の險峻なる象骨巖に上り行く者が有りとせば、そは恐らく一流の蛇使であらうと、雪竇が長慶、玄沙、雲門の三人を讃美したのである。しかし蛇を弄得するのは大して六ケしいことは無い。古人何人ぞ、我何人ぞ。要するに飯に逢ふては飯を喫し、茶に逢ふては茶を喫す。それが出來得れば可いのである。

「稜師備師奈何ともせず、喪身失命多少か有る。」稜師とは長慶のこと、備師とは玄沙のことで、長慶、玄沙同じく蛇を弄得した者ではあるが、二老共に稍や蛇を持て餘した所があると、二人を抑下して、雲門の作略を賞揚した。しかし雪竇が不奈何といふには、我が三昧に在つて我亦不知といふ意味も在ることゝ思はる。喪身

失命とは長慶の答處を頌したので、句面は蛇の毒氣に罹つて死んだ者が幾人有るかといふのであるが、眞個に大死一番し來れば、蛇の毒氣などに觸るゝことは無いのみか、直ちに自ら南山の鼈鼻蛇と成つて、一切法界をノタクリ廻ることが出來る。

「韶陽知つて、重ねて草を撥ふ、南北東西討ぬるに處無し。」流石に雲門は蛇の在所を知つて居る。そこで拄杖を打振つて其の邊の草を撥ふた。然るにイクラ草を分けて東西南北と討ね廻はしても、鼈鼻蛇は何處に在るか、更に其の蹤跡を知る由も無い。知る由も無い筈だ。垂示にもある通り、擒縱他に非ず、卷舒我に在りで、箇の我を自ら照鑑すること莫くして、徒らに鼈鼻蛇の蹤跡を討ねやうとしても能はぬ譯だ。之を尋ね當てやうといふには、是れ亦垂示に所謂直ちに須らく迹を削り聲を呑むべしで、これは口授言道の間に非ず、須らく是れ自肯の心を辨じて始めて得べきものである。

「忽然として突出す拄杖頭。雪峰に拋對して大に口を張る、大に口を張る閃電に同じ。」曷ぞ知らん、その撥草した所の拄杖が即ち蛇であつた。見よ拄杖頭は巨口を開き、雪峰目懸けて毒氣を吹いて居る。雪峰和尚を一呑みと血盆の口を張るそのさまは、一閃の電光空を切るがやうだ。

「眉毛を剔起すれば還つて見えず。」眉毛をつり上げて其の蛇を見極めやうとしても、見んと欲すれば還つて見えず。見えぬ筈だ。その蛇こそは汝等諸人の面門より出入する一無位の眞人で、朝から晩まで人人の面門より出入して、六根六識の上に分別料簡する其の當體であるからである。

「如今藏して乳峯の前に在り、來る者は一一方便を看よ。」乳峯とは雪竇の在所を云ふので、其の蛇ならば、正に藏めて我が手中に

在りと云ふ鹽梅。サア其の蛇はシツカと自分が預かつた。しかしそれを見るには、一ト通りではいかぬ。此の蛇を見るには、見るべき手段が有ると雪竇は云ふ。白隱禪師は、如今藏在乳峰前の一句重く力强くて、南山に一條の鼈鼻蛇在りといふよりも、亦雲門の拄杖よりも遙かに超絶したものだと讃嘆されて居る。

「師高聲に喝して云く、脚下を看よ。」これは記者の附言である。雪竇和尙一段と聲を勵まして、乳峯と聞いて回首するな。若し此の間に一念を起さば千里萬里だ。汝等の脚跟下を照顧せよと言ふ。百丈の所謂森羅及萬象、一々自己に轉歸すと云ふものである。

青林和尙に本則と全然同じき商量がある。一僧が青林和尙に問ふ、「學人徑に往く時若何」と。青林は「其の路には毒蛇が居るから、用心して出喰はさぬやうにせよ」と云ふ。僧が「もし出喰はした時は如何なりますか」と問ふので、青林は「無論命が無くな

る」と答ふると、僧は「それでは出喰はさない時は如何なりませう」といふ。青林は「それでも避ける途はない」と應ふ。「それなれば、斯うして居る間は如何でせう」。「何處か其邊に蛇が居つたかと思ふたら、早や見失つた」。「何處へ參りましたらう」。「どうも草が深いので尋ねやうが無い」。「圍ひでもしてつかまへたら良いでせう」。すると青林は「そうはいかぬ。四方八方蛇の毒氣だらけだから」と答へた。此の類の問答は、多く禪林に行はるゝものであるが、詮ずる所、諸人をして雪竇の所謂脚下を看せしめんとする方便である。

第二十三則　保福妙峰頂

垂示云、玉將火試、金將石試、劍將毛試、水將杖試。至於衲僧門下、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶。要見深淺、要見向背。且道將什麼試。請擧看。

「垂示に云く、玉は火を將つて試み、金は石を將つて試み、劍は毛を將つて試み、水は杖を將つて試む。」鍾山の玉は、灼くに爐火を以てするに、三日三夜にして色澤變ぜざれば即ち至德なりとある如く、玉は火を將つて試みる。金は、試金石と云ふ黑色の硬度の高い石を以て磨し、其の色に依つて好惡を判定する。劍の斬れ味は、刄上に髮の毛を吹き付けて之れを試みる。利劍なれば髮の毛は見事に兩斷となる。水の深淺は杖を以て之れを探ぐる。「衲僧門下に至つては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す。」されば叢林の修行に於ては、或は問對の間に、或は揚眉瞬目、拈槌竪拂の間に、或は進退坐作の上に、或は辭令交換の上に、學人知見の深淺と、其の修道の是否とを辨驗しやうとする。「且らく道へ、什麼を將つてか試みん。請ふ擧す、看よ。」然らば玆には何を以てか試みん、則ち其の一例が在ると示衆した。

擧。保福長慶遊山次、福以手指云、只這裏便是妙峰頂。慶云是則是可惜許。雪竇著語云、今日共這漢遊山圖箇什麼。復云、百千年後不道無只是少。後擧似鏡清。清云若不是孫公便見髑髏遍野。

「擧す。保福、長慶、遊山する次、福、手を以て指して云く、只這裏便ち是れ妙峯頂。」保福、長慶、鏡淸、共に雪峯門下で、皆同得同證、同見同聞の間柄である。或る日、保福、長慶の二人が遊山した時、山中を歩きながら、保福が獨言のやうに眼前の地を指して、此處が妙峯山の頂上だナと云ふ。「華嚴經」の入法界品に、

「妙峯孤頂の德雲比丘、從來山を下らず」とありて、妙峯頂とは一味平等の法門を表したことに成り、德雲比丘とは、萬德具足して、一切の萬善萬行皆之より出づと謂はるゝものだ。然るに善財童子といふが、この法門に入得せんが爲、德雲に相見せんとして、妙峯に登つたが、七日まで逢ふことが出來なかつたといふ。茲に七日とあるは、七覺支を表すといはれ、涅槃に到る行道中の第六道法で、初發心の時、此の最初の覺悟と信念とが正覺を辨成せんが爲に、最も大切で、善財童子も訪道尋師の第一歩に於て、之を修したと見らるゝのである。所が七日の後、思ひがけなくも別峰に於て相見した。すると德雲は善財の爲に、「華嚴經」の大意とする一念三世、一切諸佛、智慧光明、普見の法門を說いた。サア此處に問題と成るのは、德雲比丘從來曾つて山を下らず、常に妙峯孤頂に在りと云はれて居りながら、何に因つてか却つて別峰に在つて、善財と相見したかといふ點である。されば圜悟も評中に於て「這裏に到つて、德雲と善財と、的々那裏にか在る」と問ふて居る。この問處に向つて、李長者といふ人が「華嚴合論」の中に「妙峯孤頂は是れ一味平等の法門、一一皆眞、一一皆全、無得無失、無是無非の處に向つて獨露す。所以に善財見えず。稱性の處に到つて、眼自ら見えず、耳自ら聞えず、指自ら觸れざるが如く、刀自ら割かず、火自ら燒かず、水自ら洗はざる如し」と論じて之に

對へて居る。これで妙峯頂の什麼物たることをも、保福の此處が妙峰山の頂上だナと云ふた底意をも、亦之を知ることが出來る。

然るに

「慶云く、是は則ち是、可惜許。」長慶は、是なることは是なれども、はや言句に表せば妙峯頂で無い。可惜妙峯頂に疵がついたと云ふ。趙州和尚に、僧有りて別れを告ぐると、和尚は何處へ往くと問ふ。僧は諸方に遊歷して、佛法を學ばうと思ひますと答ふると、趙州は有佛の處住することを得ざれ、無佛の處急に須らく走過すべし。三千里外、人に逢ふて錯つて擧することを得ざれと警しめた。すると僧は當惑した。有佛の處に留まつてもいかず、無佛の處は急いで走つてしまへとなると、進止どうして良いか分らぬ。そこで僧は、それでは何處へも參らぬことに致しませうかといふと、趙州はイヤ往け往けと云ふ。這僧實の山に在りながら、徒らに手を空うして居る。佛法を諸方に學ばんと謂ふ。趙州は一頭地を抽んでて佛法にも住すべからず、非法にも住すべからず、凡聖二邊に滯るべからず、これが眞實の佛法だと示誨して居る。されば長慶の可惜許と一拶を與へたのも、正位にも住すべからず、偏位にも住すべからず、德雲は是れ比丘ならず、妙峯頂は是れ山ならず、若し這邊那邊に取著する所が有れば、折角の妙峯頂が寂光淨土に成らぬと惜んだのである。

さは去りながら、保福も長慶も堂々たる一箇の禪和子である。只だ這裏便ち是れ妙峯頂と獨り言のやうに、しかも長慶に聞けがしに云ふたは、所謂風無きに浪を起したもので、長慶を試みたものである。されば風外和尚も保福是れ好心ならずと著語されたやうに、若し長慶此の時オウ左樣ぢやと應へやうものなら、直ちに崕下に推倒する心搆へだ。そこを長慶も早く知つて、是は則ち是、

可惜許と、能縱能奪に出でたものと見るべきである。さればこそ「雪竇著語して云く、今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖る。復た云く、百千年後無しとは道はず、只だ是れ少し。」保福は妙峯頂と云ひ、之に對して長慶は可惜許と云ふ。兩人遊山玩水しながら、一體什麼を仕出かさうとするのか。爾知らずや、觸處是れ妙峯頂、何人か德雲比丘爾と別人に非ず。之に對して惜しいの、是は則けんや、德雲比丘にあらざる。妙峰何ぞ方位を指すべち是などと云ふも亦何の意義をか爲さん。とは謂ふものゝ妙峯頂の所在を擧著して、其の全眞を露呈せしむることは、之を圖つて容易なことではない。之を圖つて得る者は今後絶無とは言はぬが、極めて少いものであらうと云ふのである。

「後に鏡清に擧似す、清云く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏野に遍きことを見ん。」孫公とは長慶のことで、長慶の俗姓は孫氏である。遊山から還つて後、鏡清に二人が商量したことを話したものであらう。之を聞いて鏡清は、流石は孫公だけあつて、出かした出かした。若し孫公が抑へて可惜許と言はなんだら、參禪の修行者等は、皆盡く理邊に逗滯して、六部悟りに終つてしまふ所であつたらうといふ。趙州も亦僧の「如何なるか是れ妙峯孤頂」と問ふに應へて「老僧爾に這の話を答へず」といふ。僧が「什麼と爲してか這の話を答へざる」と詰ると、趙州は「我若し爾に答へなば、恐らくは平地上に落在せん」といふ。俺がお前に答へやうものなら、お前は妙峯頂を知る前に、早くも萬仞の崖下に落込んでしまふぞとは、鏡清の髑髏野に遍きことを見んといふと孰若ぞ。

妙峰孤頂草離離。拈得分明付與誰。不是孫公辨端的、

髑髏著地幾人知。

「妙峯孤頂草離離。」妙峯孤頂が、一味平等の絶對的本體である以上は、萬里無寸草であるべき筈だに、草離離とは底事ぞ。然るに一味平等の本體それは即ち相對差別の現象であると云ふから、萬里無寸草の當處が即ち草離離であるべき譯だ。洞山大師は、夏末の示衆に於て、「秋初夏末、直ちに須らく萬里無寸草の處に向つて去れ」と云はれた。然るに大衆無語。そこで一僧有りて、之を石霜禪師に擧似すると、石霜が云ふのに、「何ぞ門を出づれば便ち是れ草と道はざる」と。人人が步步踏著する所即ち是れ無寸草の處で、同時に草離離の處である。無寸草の處といふも、別に方處の有る譯でなく、妙峯孤頂といふも、復た必ずしも方位を指す可きで無い。されば保福は、妙峯孤頂と、イツカナ無寸草の當處を聞

かした積りであらうが、そこが矢張草離離で、草の生ひ繁つて居るムサ〳〵しき平山に外ならぬと頌したのである。

「拈得分明なり誰にか付與せん。」保福が妙峯頂を持ち出して之を拈弄した意味は、能く分つて居るが、それでは一體妙峯頂を拈得し來つて誰に付與する積りであらう。不可說の妙法は拈得して誰に付與しやうもあるまい。

「是れ孫公端的を辨ずるにあらずんば髑髏地に著く幾人か知らん。」幸に相手が長慶であつたらばこそ、うまく不惜許で抑へて呉れたから佳かつたものゝ、然らざれば、鏡淸の批評したやうに、天下の衲僧共は生半可の悟に落ちて、慘澹たる光景を呈したことであらうに。

妙峯頂に就て大燈國師の妙偈がある。曰く妙峯孤頂雖人到、只看白雲飛又歸、松檜蒼々歷幾歲、莫敎巖畔鳥聲稀と。

第二十四則　鐵磨到溈山

垂示云、高高峰頂立、魔外莫能知。深深海底行、佛眼顧不見。直饒眼似流星、機如掣電、未免靈龜曳尾。到這裏合作麼生。試擧看。

「垂示に云く、高高たる峯頂に立つて、魔外も能く知ること莫し、深深たる海底に行いて佛眼顧れども見えず。」高高峰頂立、深深海底行とは、藥山和尚の語で、藥山が嘗て鼎州の刺史であつた李翺と云ふ人から「如何なるか是れ戒定慧」と問はれて、「貧道が這裡、此の閑家具無し」と答へると、李翺は正直に「玄旨測り難し」と陳ぶ。すると藥山は「太守此の事を保任し得んと欲せば、直ちに須らく高高たる峯頂に向つて立ち、深深たる海底に行くべし」といふた語から出て居るので、其の高高たる處、天魔外道も知ることが出來ず、其の深深たる處、五眼を具ふといふ佛眼も見ることが出來ぬと、禪の境界は外間の能く窺ひ知る所に非ざることを云ふ。「直饒眼、流星に似て、機、掣電の如くなるも、未だ免れず、靈龜尾を曳くことを。」假令烱眼頓機の漢有つて明敏能く見、俊發能く察するとしても、苟且にも一念心頭に到らば自ら其の痕跡を殘すことを免れ得ない。靈龜尾を曳くとは、「莊子」にある喩で、怜悧な龜が海濱の砂中に卵を產み付け、人に知れないやうにと砂をかけて行くが、長く尾を曳いて砂地を行くから、直ちに卵の在所が知れると云ふことである。「這裏に到つて合に作麼生。試に擧す、看よ。」靈利の衲子も、尙ほ言行の跡有るを免れ難いとすれば、畢竟如何すれば則ち可ならん。此の公案を看よと。

舉。劉鐵磨到二潙山一。山云老牸牛汝來也。磨云來日臺山大會齋、和尚還去麽。潙山放身臥。磨便出去。

「舉す。劉鐵磨、潙山に到る。山云く、老牸牛、汝來也。」この則は圜悟も評中に「爾看よ、他、一へに說話の如くに相似たり。且つ是れ禪にあらず、又是れ道にあらず、喚んで無事の會と作し得ん麽」と云ふてある如く、極めて平々淡々の裡に、互に宗旨の分を明かにして居るので、「頌古稱提」にも、兩手相打つ、聲何れより出づと評して居る。便ちこの則は雙放雙收といふて、鐵磨到潙山から和尚還去麽までが雙放、潙山放身臥から磨便出去までが雙收で、主家放行する時は、賓家も放行し、主家把住する時は、賓家も把住すと謂はるゝものである。

劉鐵磨は尼僧で、口牙俊利、機鋒峭峻、人能く之に當り得る者が無いので、時人は之に鐵磨の名を與へたと云ふ。其の劉鐵磨が一日潙山和尚の許へやつて來た。和尚は、尼の來たのを見て、此の老ぼれ牝牛め、やつて來たナと云ふ。言中響有り、油斷が成らぬ。總評にもあるが、牛は潙山の理想であつたと見え、曾て示衆の時、「俺が死んだら、山下檀越の家に入つて、一頭の水牯牛と作り、左の腋下に五字を書いて、潙山僧某甲と云はふ。その時若し人有つて潙山僧と喚べば、イヤ是れは水牯牛だと答へる。若し水牯牛と呼べば、イヤ某甲は潙山僧だと挨拶する」と謂ふたことがある。この時、潙山僧を知らんと欲せば、水牯牛と觀ること莫れ、水牯牛を知らんと欲せば、潙山僧と觀ること莫れと指月老人は拈評して居る。今の場合でも潙山は劉鐵磨を指して牛といふ。サア此の老牸牛に參して見ねばならぬ。この老牛は來るものか、行く

ものか、老牛に名相が有るものか、無いものか。

「磨云く、來日臺山に大會齋あり。和尚還つて去る麼。」五臺山は潙山を去ること數千里の遠きに在る。一寸やそつとで往かれる處では無いのに、それを何となしてか斯く云ふとならば、この去麼は畢竟來也の返報で、老ぼれ牝牛め、やつて來たナといふを、竹篦返へしに、明日五臺山に大供養の法會がありますが、和尚さんそれにお越しになりますかとは、法界に去來の消息無き端的を道破した尼の見識である。されば圜悟は著語して「大唐に鼓を打てば新羅に舞ふ」と云ふ。來也に來也の語迹無く、去麼に去麼の語迹は無い。元來遠近に渉らぬ消息を謂ふたものだ。曹山禪師が行脚の爲、洞山大師を辭するとき、洞山が問ふ、「甚麼の處に向つてか去る」と。曹山は「不變異の處に去る」と應へる。洞山が「不變異の處豈に去ること有らんや」と云ふに對して、「去るも亦不變

異」と曹山が答へたことがあるが、これも亦如如不動の底裡を聞かしたものである。

詮ずるに、本則に於ける潙山劉尼の商量は、實に「金剛經」に所謂如來者無所從來亦無所去の佛所說の義を實演するものである。「如來は、如如本性也。本と動靜無し、所以に來る無く去る無し、故に假りに如來と名づく。」又た「緣有るを以て則ち視はる、水清うして月現はるゝが如し、月實に來らず。緣盡きて則ち隱くる。譬へば水濁つて月隱くるゝが如し、月實に去らず」と註してある如く、如來は來つて而して來る無く、去つて而して去らず、住して而して住せず、動に非ず、靜に非ず、其の趣を威儀寂靜と云ふ。即ち如來は四威儀を以て見る可からずといふ所以のものである。

昔、肅宗皇帝が國一禪師を詔して、內道場に入らしめた。國師は帝を拜して身を起す。肅宗が其の儘にと國師を劬はると、國師は

「檀越何ぞ得て四威儀中を以て、貧道を見ん。斯の如きの歩歩行之を寂靜と謂ふ」と、威儀を以て見るべからざるの當處を示したことがある。即ち法身の本佛は動かざること虛空の如くであるが、應身化身は緣有らば機に隨つて應現する。しかし出現すとはいふも、而かも實に出現する所が無いと云ふのである。此の如來行を溈山と劉尼とが實演して見せた。

「溈山身を放つて臥す。」是れ何の境ぞ。圜悟は之を評して「溈仰下に之を境致と謂ふ。風驚草動するにも悉く端倪を究む。亦之を隔身の句と謂ふ。意通じて語隔る」と云ふたが、即ち溈仰宗では、斯ういふ處を認めて境致と云ふ。心境一致とでもいふべきものか。一寸した所にも、早や其の極處を看て取る。亦之を隔身の句とも謂ふ。語隔つと雖意自ら通ずるからである。圜悟は更に「誰か知る、遠き煙浪に別に好思量有ることを」と著語した。これは齊己

といふ僧の、水を觀るの詩中にある句を引用したものであるが、臥た處に油斷のならぬところが有る。是れは尼が少しでも工夫に渉るか、どうかといふ所を見んとする態度であると解したものである。

「磨、便ち出で去る。」尼は和尚のコロリと臥た姿を見て、何とも言はずに出て往いてしまつた。大智禪師は、「五湖の煙景誰有つてか爭はん」と註して居る。

曾騎鐵馬入重城。　勅下傳聞六國清。
夜深誰共御街行。　猶握金鞭問歸客。

「曾て鐵馬に騎つて重城に入る。」これは劉鐵磨到溈山の處を頌す。即ち尼が溈山深密の機用を試みんと驀直に往いた勢は、恰かも肥

馬に鞭つて九重城郭に入り、天下の治亂を窺はんとするものにも似たさまだと謂ふのである。

「勅下つて傳へ聞く六國の清きことを。」然るに秦の帝城に入つて見れば、天子の勅下つて、六國已に定まり、天下一統の基立ち、四海泰平に成つたと傳へ聞いて、今まで張りつめて居た力も拔けたと云ふ鹽梅。これは潙山が老牸牛汝來るやと道ふ其の當處が、如何にも寂靜安貼で、清平世界に閑地無く、車馬往來人人を看るの趣有るを云ふたのである。

「猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ。」天子の勅は拜聞したけれども、なほ果して然るや如何と、念の爲め馬上ながら城中より歸り來る有司に問ふと云ふのは、尼が潙山の來也に對して、臺山の無遮會に往くかと尋ねたことを頌したのである。金鞭を握るとあるは、潙山の一拶に屈せず、一矢相酬ゆと云ふ氣勢を敍するものである。

「夜深うして誰と共にか御街に行かん」と云ふは、潙山放身臥、磨便出去とある所を頌出したもので、更に進んで深く城內に入つたものゝ、夜更けて城內はヒツソリ靜まり返へり、往來の人絕えて、宮府の消息も人心の歸嚮も、之を知るに由も無いといふ。夜深うして誰と共にか御街に行かん。誰も連れに成る者は無い。圜悟は更に此の句に對して「君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ」と著けて、之を玩賞して居る。潙山は臥する、鐵磨は出て行く。箇々轉處に立在して、各々其の本位に歸した。互に何の求むる所も有らざれば、別に同道同步の要も無い。圜悟は更に評末に、風穴の答話を以て結んで居る。それは「見ずや、僧風穴に問ふ、潙山道く、老牸牛、汝來也と、意旨如何。穴云く、白雲深き處金龍躍る。僧云く、只だ劉鐵磨、來日臺山に大會齋あり、和尙還つて去る麼と道ふが如きんば、意旨如何。穴云く、碧波心裏玉兎驚く。僧云く、

潙山便ち臥す勢を作す、意旨如何。穴云く、老倒疎慵無事の日。閑眠高臥青山に對す。此の意亦た雪竇と同じきなり」といふのである。風外老人は、肝要の處だから之を補ふと言ふて「僧云く、磨便ち出て去る、意旨如何。穴云く、急水上に毬子を打す」と加へて居るが、參得して看ねばならぬ所である。

大慧武庫に曰く「圜悟和尚後ち昭覺に住す。長老有り問ふ、劉鐵磨到潙山の問答、併せて雪竇御街行の頌、未審し意旨如何。悟曰く、老僧更に參すること四十年、也た雪竇の處に到らず。長老歎じて曰く、昭覺和尚猶ほ此の如し、況んや餘人をや」と。

第二十五則　蓮華峰柳樑

垂示云、機不離位墮在毒海。語不驚群陷於流俗。忽若擊石火裏別緇素、閃電光中辨殺活、可以坐斷十方壁立千仞。還知有恁麼時節麼。試擧看。

「垂示に云く、機、位を離れずんば、毒海に墮在す。」この一句は洞山大師の三滲漏の第一句で、大師、曹山禪師に向つて、若し向上の人の眞僞を辨驗せんと要せば、三種の滲漏有り、其の第一を見滲漏といふとて、機、位を離れざれば毒海に墮在す、妙は轉位に在るなりと言はれたことから、古今禪門に於ける有名な語句となつた。

機とは心のキザシ、位とは機の位といふ義にて、心的作用の由て來る所を云ふ。即ち機、位を離れずとは、人々日用光中、境に對して種々に心が動く、欣ぶ厭ふ、欲しがる惜しがる、良いの惡いのと隨時隨處に心が萠す、其の萠した心が一處に停著して外境と離れぬ、之を機、位を守るともいふ。それでは妙用自在を失ふて毒海に溺沒し、遂に自ら救ふべからざるに至る。そこで洞山大師の、妙は轉位に在るなりと謂はれた如く、機、位を轉ぜねばならぬ。機、位を轉ずるとは、澤庵禪師が柳生但馬守に與へたといふ書中に、「動轉せぬとは、物毎に留まらぬことにて候。物一目見て其の心を止めぬを不動と申候。譬へば十人して一太刀づつ我に太刀を入るゝとも、太刀を受け流して跡に心を留めず、跡を捨て跡を拾ひ候はゞ、十人ながらへ働きを闕かぬにて候。十人十度心は働けども、一人にも心を留めずば、次第に取り合ひて働きは闕

け申間敷候。若し又一人の前に心が留まり候はゞ、一人の打太刀をば受け流すとも、二人の時は手前の働き拔け可申候」といふ言葉が有るが、畢竟此の自由な作用を云ふのである。「語、群を驚かさゞれば、流俗に陷る。」詩人杜甫は、語不驚人死不休と云ふた。苟くも心機發して言語に現はれたからには、それが爲人利生の目的に適はぬ限り、結句平々凡々に終る。「忽ち若し擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨せば、以て十方を坐斷して、壁立千仞なるべし、還つて恁麼の時節有ることを知る麼。試みに擧す、看よ。」若し機、位を離れ、語、群を驚かす底の漢有りて、電光石火の間に物の黑白を判別し、問題の要所を把握せば、迷悟凡聖、生死涅槃の外に超然として、化導自在の働きが出來る。若し能く大死一番の功夫を經ば、右のやうな境地に到ることが出來るのであるが、そういふ時節の有ることを知つて居るかと、學人を警し

めて本則に攝歸した。

擧。蓮華峰庵主拈拄杖示衆云、古人到這裏爲什麼不肯住。衆無語。自代云、爲他途路不得力。復云、畢竟如何。又自代云、柳樑橫擔不顧人。直入千峰萬峰去。

「擧す。蓮華峰庵主、拄杖を拈じて衆に示して云く、古人這裏に到つて什麼と爲してか肯て住せざる。」蓮華峰といふは、天台山中の一峰で、この蓮華峰に結庵して居るのが卽ち蓮華峰庵主である。總じて庵主といふのは、大事了畢して居つても、名山大刹に出て衆に接せず、多くは山間僻地に隱れ、茅茨石室の中に果食澗飲して、名跡の累を逃れた者である。この蓮華峰庵主も亦多分その

類の人であらう。其の庵主が拄杖を拈じての示衆に、古人這裏に到つて、什麼と爲してか肯て住せざると、サア此の拄杖子を看よ。

元來拄杖といふものは、印度に於ては渡水の時水の深淺を測り、山行の場合に蟲類に警戒を與へたりする爲の用具であつたが、支那に來てからは、一向そういふ用途には使はれず、大に修禪の目的に向つて活用せらるゝに至つた。卽ちこの一本の拄杖子、或は無邊刹境に彌り、十世古今を貫き、或は龍と化し、枯柴と作り、與奪自在、縱橫無礙の妙用を作す。長慶は拄杖を拈じて示衆して云ふ、「這箇を識得すれば、一生參學の事畢る」と。黃檗はまた「諸方の老宿盡く我が拄杖頭上に在り」と云ふ。然れば長慶黃檗は偏に一本の拄杖子を賴りとするらしく、而して蓮華峯庵主は、古人は決してこの拄杖子一本の境界ばかりを賴りにはせなんだといふ。然るに元來庵主の謂ふ到這裏の這裏に、方位界畔が無い、實

は庵主自身も亦身を兼ねて其の内に在る。不肯住といふも、佛界にも魔界にも、天堂にも地獄にも、實に住すべき處は無い。それに什麼と爲してか、這裏といひ不住といふ。

「衆、無語、自ら代つて云く、他の途路に力を得ざるが爲なり。」庵主は拄杖を拈じて來者を接すること前後二十年、終に一人の答へ得る者が無かつた。已むなく自ら代つて云く、他の途路に力を得ざるが爲なりと。古人が這の拄杖裏に肯て住しないのは、道中の役に立たぬからだと云ふ。途路とは、「臨濟錄」中の「一人有り、劫を論じて、途中に在つて家舍を離れず。一人有つて、家舍を離れて、途中に在らず」といふ語句から來つたもので、これを意譯すると、例へば紫磨黃金佛の働きの如きを云ふもので、凡そ世の中の在りとあらゆるものゝ中に宿り、度生利他の行業に終始して嘗て已むことが無いと云ふのに、それでゐて、佛眼も覩れども見

えず、魔外も窺ふに路無き自家本有の處を離れない。道中に在るといふから、己が住所は夙に離れてあるべき筈だのに、是れはまた格別だ。古人は這の一人に對して、名花傾國兩相歡、常得君王帶笑看と下語して居る。いま一人は既に本分の家舍を離れて居ながら、去りとて途中にも姿が見えぬ。この者の行衛は果して何處でがなあらう。古人は之に對して、白狼河北音書斷、丹鳳城南秋夜長と下語して居る。要するに臨濟の這語は、諸佛果滿圓成の德を讃へたもので、庵主も佛の道中に拄杖は要らぬ。毎日地獄を三遍廻るといふ地藏菩薩に、杖は却つて邪魔物だといふ。

「復た云く、畢竟如何。」途路に力を得ずと云ふことなれば、それでは日用の行履は畢竟如何といふ。

「又た自ら代つて云く、柳樑橫に擔つて人を顧みず、直ちに千峯萬峯に入り去る。」庵主が畢竟如何と重ねて問ふたが、前同樣大衆

默然として居つたと見える。そこで庵主復た自ら代つて答へた。

柳樑は言ふまでもなく拄杖のことである。

さてこそ玆に到らざれば則ち休すべからずだ。庵主は拄杖子を肩に懸けて、一向にお構ひなくサツサと蓮華峯中に身を沒し去つた。「爾に拄杖子有らば、我れ爾に拄杖子を與へん。爾に拄杖子無くんば、我れ爾が拄杖子を奪はん」と芭蕉和尙が言へば、「爾に拄杖子有らば、我れ爾が拄杖子を奪はん。爾に拄杖子無くんば、我れ爾に拄杖子を與へん」と眞淨和尙は言ふ。そこで右に對して虛堂和尙は「請ふ各各者の拄杖子を放下せよ」と一轉語を放つ。大慧禪師の如きは「爾眞個に參ぜんと要さば、但だ一切放下せよ。大死人の如く相似て、百不知、百不會。驀地に不知不會の處に向つて、這の一念子を得て破せよ。佛も也た爾を奈何ともせじ」とまで謂ふ。一體拄杖を拈掇したり、小脇に抱へ込んだりして居る

から、ヤレ有るの無いの、ヤレ與ふるの奪ふの、ヤレ這裏の那裏の、ヤレ住するの住せざるのなどと、徒らに勞煩を生ずるこそすれ、大慧の所謂驀地に百不知、百不會の處に向つて、這の拄杖子を放下し去らば、立地に上、片瓦の頭を蓋ふなく、下、寸土の足を托するなき洒々落々の境に到るであらうに。黃檗の「諸方の老宿盡く我が拄杖頭上に在り」といふ時、在るものは祇だ諸方の老宿ばかり、黃檗の手裡復た一本の拄杖だも無く、長慶の這箇を識得した時、拄杖は業に長慶獨己の物ではない。蓮華峰庵主も到頭溜らず、古人不肯住と自ら打出した其の拄杖子を擔いで、千峯萬峯に入り去つた。これで萬事結了だ。尤も千峯萬峯といふも深山幽谷の謂ひではない、觸處沒縱跡だ。禪では、其の沒縱跡の處に坐著するも亦妙ならずとして許さぬ。那邊を退得して、這邊に行履せねばならぬといふ。評中にもあるが、嚴陽尊者は先きに一物

不將來、放下這什麼といふて、趙州に叱られた。しかし今は一段の進境だ。拄杖を擔いで會す麼と僧に問ふに、僧が不會と答ふると、「櫛標横に擔ふて人を顧みず、直ちに千峯萬峯に入り去る」と拶著し去つた。是に到つて尊者も、眞個に一物不將來、最早放下すべき這の什麼物も無い。

眼裏塵沙耳裏土。千峯萬峯不肯住。落花流水太茫茫。
剔起眉毛何處去。

「眼裏の塵沙耳裏の土。」これは庵主の境界を稱揚した一語で、庵主には見聞兩つながら無い。去りとて一向に見聞が無い譯ではなく、見聞はするが、心境俱に忘して居るから、暗なれば則ち天地と與に暗、明なれば則ち天地と與に明といふ程のものである。大智禪師は這の境界を「是れ沒蹤由の者の、造化の表を超えて、能く造化と躅を同うする者なり」と形容して居らるゝが、眼裏の塵沙耳裏の土と謂ふは、一言以て之を蔽はゞ、眞見は無色、眞聞は無聲といふものである。

「千峯萬峯肯て住せず。」直ちに千峯萬峯に入り去つたが、又其の千峯萬峯にも住しない。是れ趙州の所謂有佛の處住するを得ざれ、無佛の處急に須らく走過すべしといふものだ。船子德誠は藥山會裏に在つて、道吾雲巖と相弟子であつた。然るに靈利の漢が有つたら、一人世話して貰ひたいと道吾に依賴して置いて、飄然去つて華亭といふ所で渡守と成つた。後ち道吾は夾山善會禪師を物色して、華亭に遣はし、船子に相見せしめた。夾山は船子に到るや、ヒドイ鉗鎚に逢ふて大悟徹底し、やがて船子の許を辭するに當つて、船子は夾山に囑して云ふ。「汝向後直ちに須らく身を藏する處、

蹤跡を沒すべし、蹤跡を沒する處、身を藏すること莫れ。吾、藥山に在ること三十年、祇だ斯の事を明らめ得たり。汝今既に得たり。他后城隍聚落に住すること莫れ、但だ深山裏鑊頭邊に向ふて、一箇半箇を接取せよ」と。爽山は旨を領して禮辭して岸に上つて行くに、船子は船から身を投じて煙波に沒し去つたといふ。庵主は千峯萬峯に入つて去り、而して又た其の千峯萬峯にも住しない。則ち船子の所謂身を藏する處に蹤跡を沒し、沒蹤跡の處に身を藏せざる働きである。佛界にも住せず、魔界にも止まらず、佛見法見の途中にも居らぬ。然し其の千峰萬峰とは果して何の處ぞ。眼花すること莫れ。

「落花流水太だ茫茫。」落花意有つて流水に隨ひ、流水心無く落花を送る。實に沒蹤跡の當處だ。

「眉毛を剔起して何れの處にか去る。」一切處に去つて、住著する

所が無い、何處へ去つたと眉毛をつり上げて見やうとしても見えぬ。圜悟は「脚跟下更に一對の眼を贈らん」と著けた。眉毛を剔起して看ることが出來なければ、諸人の脚跟下に一隻眼を進呈致さうと云ふ。側目をふるな、脚下を看よといふ心だ。雲門大師は、「汝若し實に未だ入處を得ざれば、三世諸佛汝が脚跟下に在り、一代藏經汝が舌頭上に在り。直ちに葛藤處に向つて會取せよ」と示衆された。蓮華峰庵主は實に箇の葛藤處に向つて去つた。何方にも餘所へは往かぬ。

碧巖錄講話第一集終

おくがき

素修會は中島久萬吉男の「はしがき」にもある通り、日本工業倶樂部内の火曜會員を中心として、男爵から修養講話を御伺ひする有志の團體である。素心を修むるとか、自性を究むるとか申す意味合にて、男爵の命名せられたものである。

同人等は一昨年秋から引續き毎月二回、時には三回も碧巖錄の提唱を參聽致し來つたものであるが、聽講者の解會を容易ならしめんとの婆心から、昨年晩春より初秋にかけて、新たに般若心經、金剛經、參同契及び寶鏡三昧等に就て、懇切丁寧な御解説を爲され、碧巖聽講に對する豫備知識を與へられた。これ等の經文祖錄は、申すまでもなく、大乘佛教の根本原理を説いたものであるが、實は現代の知識人にとつては寔に難解此の上も無い一段論法である。

然るに男爵の御講義は、例證該博、義味富贍、よく吾等をして佛教の大

意を了解せしめられたのみならず、而かも深奥なる宗旨を日常の實際生活に卽して、いとも親切に釋明せらるゝが爲に、例へて云はふなら、恰度北海の堅氷が春の陽ざしに照らされて、何時とは無しに融けて流れ出すやうに、さしもに宏遠なる佛教上の眞義をも、おぼろげながら之を合點することが出來たのであつた。實にこよなき歡喜の極みである。

殊に有難いことは、男爵も「はしがき」の中に勸奬してゐらるゝ通り、吾等會員の爲に靜坐内觀の功夫を最も必要なりとせらるゝ趣意の下に、昨年嚴寒の頃から數次特に男爵邸の大廣間を坐禪の道場として開放せられ、態々鎌倉圓覺寺から「直日」を招じて、正規の坐法を實踐せしめられたことであつた。燈火のゆらぎ、警策の響も、禪堂さながらの雰圍氣に、男爵御夫妻を始め同志の者、兀として正身端坐したのである。

由來碧巖錄の内容は、理致を擯却し、言句を超脱するものだが、男爵の犀利な頭腦と精緻な研究とは、前人の型を破つて獨自の新機軸を示され、碧巖錄をして吾等にとりて大に了解し易く近前し易きものたらしめ、且つ

最も親しみ易き生活記錄として、之を心讀體得致すことが出來るやうになつたのは、偏へに男爵の盡きぬ法施として衷心感著する所である。

偶々本年早春の日、男爵は登山に際し、誤つて右腕骨折、それが爲數旬の御入院を餘儀無くせられ、其の間蓐上に在りて孜々稿を勵まれ、積んで幾んど碧巖錄の半ばに至れるを機會に、御許可を得て、いつも御講義の時配布せらるゝ要錄第二十五則までを、先づ其の第一集として玆に印刷に附することゝなつたのである。

以上本書刊行の由來を記し、中島男爵の芳情に對して甚深の感謝を捧ぐる次第である。

昭和十八年五月十九日

素修會同人識す

昭和十八年七月十日印刷
昭和十八年七月十五日發行

非賣品

著者　中島久萬吉　東京都麴町區丸ノ内一丁目二番地（日本工業倶樂部内）
編輯　素修會
發行者　素修會　東京都麴町區丸ノ内一丁目二番地（日本工業倶樂部内）
印刷者（東京二二九）東京都品川區東大崎三丁目二三九番地　鈴木茂
印刷所　東京都品川區東大崎三丁目二三九番地　中屋印刷株式會社
發行所　東京都麴町區丸ノ内一丁目二番地（日本工業倶樂部内）　素修會